「此の火既に燃えたらんには」

ルカ伝11章、12章ほか

新宿集会　聖書講筵　２０１９年６月１日（土）

奥田昌道

# 【見出し】

# ●日常生活の中に即したルカ伝

だいたい、聖書は繰り返し読むものです。一回読んで、「もう中味がわかったから、それで終わり」なんてことは絶対ありえない。いろんな印刷物が氾濫していますが、その中で「これっ！」というものは繰り返し読む。聖書はそれに価するものだと思う。最近、「令和」ということで、万葉集がまた読み返されるような時代になってきましたけれども。いいものは繰り返し読んで味わう。その中でとびっきりいいものは、新約聖書だと思います。それから新約聖書の母体となっています旧約聖書の中の創世記とか、イザヤ書とか、そういった預言書の重要なところを全体的、立体的に捉えていくという読み方を、皆さんがそれぞれ、なさっていただければいいなという思いがしています。

今日は、

「此の火既に燃えたらんには」

というタイトルを掲げました。ルカ伝12章49節のところです。皆さん、ルカ伝をお読みになるときに、

「あっ、これはマタイ伝ではあそこにあったな」

ということをきっと感じられると思う。マタイ伝とルカ伝と、書いてあることは同じであっても、場所がちがう。そういうことを比較してみられたことはありますか。

「マタイ伝ではここに書いてある。ルカ伝ではこんなところに出てきている。なぜなんだろうか」

と。マタイ伝は、整然とあとから編集されて、なにかまとめ上げられているという感じがする。非常に荘厳で──まぁ大袈裟にいえば、ものものしいというかな──格調が高い。それに対してルカ伝は、

「あっ、イエスはこういう場面でこういう時に、このことを語られたんだな」

ということがよくわかるような、日常生活の中に入りこんできて、日常生活でイエスが歩んでおられる歩みの中で、

「こういう場面で、こんなお言葉を語っておられる。こういう場面でこうだ」

と。それをマタイ伝は全部寄せ集めてきて、ひとつの論文スタイルでピシッとまとめ上げているという感じがする。つまり、格調が高く荘厳である。しかしながら、イエスは決して、マタイ伝に書いてあるあれだけの内容をいっときにお話しになることはまずあり得ないだろうなと思う。語られても、聞く方には重すぎてたまらんですよ。随所随所でイエスが語っておられるものを集大成したものがマタイ伝だとしたら、ルカ伝は、もういちど随所随所で、台所で働いている時にイエスはこんなことをお話になった、弟子たちがこんなことをやっている時にイエスはこうお話しになったというふうに、日常生活の中に即してそれぞれ語られている。ある意味では、いわば平地で語られている。山上の垂訓ではなく、山の上で語られたのではなくて、平地におり立って、そしてみんなが集まっている時に、「それはこうではないのか」と。

たとえば、ボートに乗って漕ぎだして、それから陸にいる群衆に語られたとありますね、ルカ伝の５章に。ペテロはお魚がたくさんとれたので、びっくりしたという話があるでしょ。あれなんかも素晴らしい。朝がた、ペテロが夜通し働いて、プロの漁師が、魚が全くとれなかった。それに対してイエスが、

「沖に漕ぎだして、網をおろせ」

と言われた。ペテロは、「プロの漁師に素人のあんたが何を言うんですか、プロのことはプロに任せなさいよ」というくらいの気持だったのが、

「まぁ、しょうがないですな。お言葉ですから、やってみましょう」

と。そして網を下ろしたら、その通りになった。それでびっくりして、平伏したと書いてあるでしょ。

「私は罪深い者です、おゆるしください」

と。皆さん、ああいうところの情景を思いうかべて、

「ああ、凄いな、凄いな」

という、心驚く思いでイエスのお気持、ペテロの気持――自分もペテロになって読むとか――そういう読み方をなされば、この新約聖書というのは非常にビビットに皆さんの中に活き活きと生きかえってくる、よみがえってくる、そんな思いがするんです。

小池先生は、

「聖書はドラマである。皆さんもドラマの中の一員になりなさい。時にはパウロとなり、時にはペテロになる」

と、そういうことを仰いました。ですから、そういう読み方をする。一生涯かかって、この新約聖書ととっくんで、決して飽きはこない。そういうものであると私は思います。

# ●祈らないではいられない

今日のところは、ルカ伝12章としておりますが、その前に、11章は祈りのことが出てきて、弟子たちが、

「どういうふうに祈ったらいいのか教えてください」

と。それに対して、11章では「主の祈り」というのがある。マタイ伝では整然と書かれている「主の祈り」が、少し短いですけれども、たぶんこれが本当の形であろうと言われている。「祈るときに、こう言いなさい」と。私のは文語訳です。

「２イエス言い給う『なんじら祈るときに斯く言え「父よ、願わくは御名のめられん事を。御国のらん事を。３我らの日用の糧を日毎に与え給え。４我らにある凡ての者を我らせば、我らの罪をも免し給え。我らをにあわせ給うな」』」（ルカ11･2～4）

こちらの方が非常に簡潔でしょ。大事なのはまず、

「をめさせてください」

という、「御名」、これが第一にあげられている。それから、

「をきたらせてください」

と。マタイ伝では、

「天においてが成るごとく、地にも行わせたまえ」

というふうになっています。それがここでは、

「御名を崇めさせてください。そして、御国を地上にきたらしてください」

と。それからその次は、ご飯のことです。

「のをお与えください」

と。それから、

「ある者をす」

というのは、自分に対して悪いことをした人間とか、いろいろ自分に対して道徳的な負い目を負っている者、それを

「私はもう何とも思っていません。許してますから、だから、私たちの、あなたに対する負い目をもお許しください」

という、これは人間関係で一番難しい問題ですね。人間関係でのいろんなことでのみつらみ、裏切り、そういうことに対しての釈然としない思い、それはたくさんあるはずです。それが、何も社会の人間だけではなく、家族の中でもあります。夫婦の間でもあるかもしれません。親子の間でもあるでしょう。

「そんなものをすべて、もう私は水に流します。だから、主さま、あなたに対して私が負っている負債を、どうぞ、ゆるしてください」

と。先に自分が許しているから、許してくださいと。「あなたが許してくだされば、私は許します」とは書いてない。

「私はもう既に許しました。だから、どうぞ、あなたもお許しくださいますように」

と。そうでしょ。

「あるての者を私たちは免しましたので、私たちの罪も免して下さい」

それから、

「にあわせないでください」

と。この世は試みに満ちてます。その試みに合わせないでくださいと。非常に簡潔に、マタイ伝の「主の祈り」の荘厳なるあの祈りの中のエッセンスを、こうやって我々の日常生活にふさわしい形に圧縮して、「こう祈りなさい」と言う。この祈りなら、誰でも祈れそうですよね。

それから今度は、「求めの切なるにより」ということを言っておられる。

「５また言い給う『なんじらの中たれか友あらんに、にそのにきて「友よ、我に三つのパンを貸せ。６わが友、旅より来りしに、之に供うべき物なし」と言う時、７かれ内より答えて「われを煩わすな、戸ははや閉じ、子らは我と共ににあり、ちて与え難し」という事ありとも、８われ汝らに告ぐ、友なるによりては起ちて与えねど、求の切なるにより、起きて其の要する程のものを与えん。」(ルカ11･5～8)

友だちがやってきて、「パンをくれ。遠くから友だちが来たんだけれども、差し上げるものがないので」と言ってきた。そしたら、「もう寝ているのだからゴチャゴチャ言うな」と。友だちだからといっても聞いてくれないけれども、「求めの切なるにより」と、そこまで言うならもうしょうがない――「泣く子と地頭には勝てぬ」という諺がありますね――そこまで熱心に言うなら、「しょうがないないな」といって聞くだろうと。

「ましてや、夜昼呼ばわる選民のために神さまは聞いてくださらないことはありえないよ」（ルカ18･7）

と。そういうことを言われた。ここでは、

「まして天の父は、求むる者に聖霊を賜わざらんや」（ルカ11･13）

と。これは18章にも祈りのことが出てきます。祈りは、この11章と18章の二カ所に出てきていますから、両方をしっかりつかまえて、結びつけてください。18章に、

「１また彼らに、せずして常に祈るべきことを、にて語り言い給う。２『に、神を畏れず人を顧みぬ裁判人あり。３その町にありて、そのにゆき「我がためにを審きたまえ」と言う。４かれ久しく聴き入れざりしが、其ののち心の中に言う「われ神を畏れず、人を顧みねど、５此の寡婦われを煩わせば、我かれが為に審かん、然らずば絶えず来りて我を悩まさん」と』」（ルカ18･1～5）

これは小池先生は、「祈りの本質」という――これは名講筵です、あれは市川君のお宅でほんの数名の祈祷会でお話になった。それを「祈りの本質」という黄色い表紙の冊子にまとめられている――あそこでこの、

「常に祈るべきことを」

というのを、小池先生は、

「祈らないではいられない」

というふうにここをお話になっています。「祈らねばならない」ではない。「祈らないではいられない」、そういう祈り。その譬話として、不義なる裁判官は、神を神とも思わない、人なんて何とも思っていない。しかし、この寡婦はうるさくてしょうがない。これをなんとか聞いてやらないと、一生付きまとわられてかなわん、ストーカーみたいに。だから、まぁなんとかしてやろうと。そういうしからん裁判官だと。７節に、「まして」とある。

「６主いい給う『不義なる裁判人の言うことを聴け、７まして神は夜昼よばわる選民のために、たとい遅くとも遂に審き給わざらんや。８我なんじらに告ぐ、かに審き給わん。されど人の子の来るとき地上に信仰を見んや』」（ルカ18･6～8）

「私が地上にやってきたとき、はたして地上に信仰が残っているだろうか。そのときはもう信仰なんてどこかへ無くなっているかもしれないな」

と、ちょっと憂えられたことがこの18章に出てきます。

# ●パリサイ人と取税人の祈り

それからついでに、この18章で大事なところは、「パリサイの祈りと取税人の祈り」のことが９節から14節まで出てきます。これも非常に大事なところです。まずパリサイ人の祈りです。

「９また己を義と信じ、他人をしむる者どもに、此のを言いたもう、10『二人のもの祈らんとて宮にのぼる、一人はパリサイ人、一人は取税人なり。11パリサイ人たちて心の中にく祈る

パリサイ人の祈りは、

「私はこんな立派な人間にしていただいていることを感謝いたします。あの門の外に居る取税人、あんなやつでないことを感謝します」

と、非常に立派な祈りを、胸をはって堂々とやっている。

神よ、我はほかの人の、強奪・不義・姦淫するが如き者ならず、又この取税人の如くならぬを感謝す。12我は一週のうちに二度断食し、凡て得るものの十分の一を献ぐ。

まぁこうやって、胸をはって堂々と祈っている。それに対して取税人は、今でいうなら鳥居の外なんですよ、鳥居の中まで入れない。

13然るに取税人はに立ちて、目を天に向くる事だにせず、胸を打ちて言う「神よ、なる我をみたまえ」

胸を打ちながら、

「神さま、罪びとである私を憐れんでください」

と、それしか言えなかった。

14われ汝らに告ぐ、この人は、かの人よりも義とせられて、己が家に下り往けり。おおよそ己を高うする者はうせられ、己を卑うする者は高うせらるるなり』」（ルカ18･9～14）

ところが、イエスは、

「神さまが喜んで、『ああ、わかったよ』といって受け入れてくださったのはこの取税人なんだ。胸をはって『感謝いたします』なんていうのはきらいなんだよ」

と言っておられる。これも往々にして、立派なクリスチャンというのは、こういうパリサイ人型なのができやすいんです。

「不信仰なあんな奴でないことを感謝します。私は毎週、聖日集会、礼拝に参加しております。献金も十分の一をしっかりやっています」

なんていって、それを堂々と胸をはっている。

「そういうものではないよ」

ということを言われる。それから続いて、

「天国は、のような素直な姿でなければダメだ」

ということを言われる。

「15イエスの触り給わんことを望みて、人々らを連れりしに、弟子たち之を見てめたれば、16イエスらを呼びよせて言いたもう『幼児らの我に来るを許して止むな、神の国はかくのごとき者の国なり。17われ誠に汝らに告ぐ、おおよそ幼児のごとくに神の国をうくる者ならずば、之に入ること能わず』」（ルカ18･15～17）

と言われる。それから、

「どうやったら永遠の生命を継ぐことができますか」

という問答があります。まぁいろいろと、そういうことで、この18章は非常に内容の豊かな箇所です。

# ●汝の内なる光

もう一度、ルカ伝11章に戻ります。ここで祈りのことを言われて、それから少し飛ばしまして33節、

「33誰もをともして、穴蔵の中またはの下におく者なし。

というのは、見える所に置いておかないと、下に置いて被いでふさいでいるようでは、灯火の役目を果たせない。

入り来る者の光を見んために、燈台の上に置くなり。34汝の身の燈火は目なり、汝の目正しき時は、全身明るからん。されど悪しき時は、身もまた暗からん。

これもマタイ伝にもちゃんと、あの山上の垂訓の中に出てきてますよ。それをこういう箇所で仰っている。

35この故に汝の内の光、

「汝の内なる光」という。普通の人は肉眼の視力を問題にします。ところがキリストは、

「それも大事だけれども、もっと大事なのは、内なる光だ。人には見えない。けれども、あなたの内なる光が本当に輝いているかね。そうしたら全身が明るい。内なる光が闇ならば全身が暗い。たとえ肉眼の目は見えていても、本当は見えてないんだよ」

ということを言われました。

闇にはあらぬか、省みよ。36もし汝の全身明るくして暗き所なくば、

内が輝いていると全身が明るい。そしたら、

輝ける燈火に照さるる如く、その身全く明るからん』」（ルカ11･33～36）

「輝ける燈火に照されるように、そのからだが全く明るくて、人々をも導いていくことができる」

と言われた。

それから次はまた、パリサイ人との問答が出てきます。これも非常にパリサイ人の在り方とキリストの在り方のコントラストがよく出てます。何かといいますと、パリサイ人は外側なんです。すべて外側なんです。祈りだってそうでしょ。

「人に見せびらかすように、街道の辻だとか、そんな所で長々と祈っている」（マタイ6･5）

と、マタイ伝にありますね。ところが、イエスは、

「戸を閉じて部屋にこもって、隠れたるところを見たもう隠れたる父に祈れ」（マタイ6･6）

と仰った。

それと同じようにここでも、パリサイ人は食事の前に一生懸命に手を洗う。場合によっては身体を洗う。そうやって外を清めて、それから食事にはいる。ところが、イエスはそんなことはなさっていない。ごくナチュラルなんです。それに対して、パリサイ人が文句をつけたというのがここです。

「37イエスの語り給えるとき、或るパリサイ人その家にて食事し給わん事を請いたれば、

「どうぞ、食事に来てください」と、お食事に招いた。招いたけれども、ケチをつけているわけです。

入りて席にきたもう。38食事前に手を洗い給わぬを、此のパリサイ人見て怪しみたれば、

「あれ、この人は律法を犯している」というわけです。

39主これに言いたもう『今や汝らパリサイ人は、と盆との外をくす、されど汝らの内はと悪とにて満つるなり。

これもきつい言葉ですね。

「あなたの内は貪慾と悪で満ち満ちている」

と。

40なる者よ、

「バカッタレ、バカ者めが」と、こんな感じです。

外を造りし者は、内をも造りしならずや。41唯その内にある物を施せ。さらば一切の物なんじらの為に潔くなるなり。

だから、内側にあるものが自ずと提供されてくる。

「内側が清ければ、外側は問題ではないんだよ」

ということをここで言っておられる。

# ●十分の一献金

それから更に続きまして、十分の一献金のことも出てきます。

42なるかな、パリサイ人よ、汝らは・その他あらゆる野菜の十分の一を納めて、

この「十分の一」をなぜ献げるのか。レビ族のためなんです。十二部族の中でレビ族はひたすら神に仕える仕事をやっている。働かない。だから、他の十一部族が自分たちが働いて得たものの十分の一をレビ族に献げることによって、レビ族は生活が保証される。そして、お勤めを果たす。その恵みがまた十一部族に戻ってくるわけです。そういう形で循環していく。そういうことで始まった「十一献金」なんですね。その後キリスト教会が受け継いで、十分の一献金とか、まるで律法のように言いますけれども。

あれは私にとっては、かつては非常に重荷になった。あるとき、宣教師が主導する聖会というのがありまして、八尾や奈良やなにか三つくらいの教会の人が集まって聖会というのがもたれた。そのときに、「何か、皆さん、質問はありませんか？」といわれたので、私は手を挙げて、

「十分の一献金は、手取りですか、それとも天引き前ですか？」

と聞いた。答えてくれなかったです（笑）。いや、私にとってはものすごく大問題でした。名目の献げ物の十分の一と、手取りの十分の一とはずいぶん違うわけですよ、いろんなものが天引きされてますから。そのどれが本当の十分の一か、それをぜひ聞かせてもらいたいと。

マラキ書には、

「神さまのものを、お前たちは盗んでいる」

と書いてある。あれがグサッときましてね、

「十分の一を献げないものは神さまに属すべきものを盗んでいる」

と、ちゃんとマラキ書に書いてありますよ。旧約聖書の一番最後の書がマラキ書です。また、宣教師はそういうことをギャァギャァ言う。そしたら、こっちは心がいつもグサッグサッと刺される。それで私は質問した。そしたら答えてくれなかった。

公平と神に対する愛とをにす、されど之は行うべきものなり。而して彼もまた等閑にすべきものならず。

だから、ここでも、「あなた方パリサイ人は、あらゆる収穫物の十分の一をきちんとやって、それで自分は義とされているとれているけれど、でも、神さまが求めているのは公平そして愛――神に対する愛、人に対するまた愛でしょうね――それを求めておられる。キリストはその両方が大事だということをここで言われた。つまり、公平と神に対する愛は、どんなことがあってもやらなければならないと。だからといって、十分の一はどうでもいいとは言わない。まぁそちらの方も一応、大事にするんだよと。一応、律法というものに対して敬意を表しておられるわけです。

43なるかな、パリサイ人よ、汝らは会堂の上座、市場にての敬礼を喜ぶ。

つまり、人に見えるところを非常に重んじている。ところが内側はまったくわからない。

44禍害なるかな、汝らはれぬ墓のごとし。其の上を歩む人これを知らぬなり』

墓というのは不吉なものです。墓の上を歩くと、その不吉なものが自分に移ってくるという。そこで白く塗って、墓であることを隠して、白く塗っておくと墓のりがこないというので、非常に墓の上は白く塗ったそうです。パリサイ人はそんな者だと。白く塗っているから、人から見たら無難、無事に見えるけれども、実は内側はでしょうがないやつだと。そういうような厳しい批判なんです。だから、次にあるでしょ、45節に、

45教法師の一人、答えて言う『師よ、かることを言うは、我らをもしむるなり』

律法学者の一人が、「先生、そんなことを仰るなら、我々に対する侮辱ですよ」といってプロテストしている。そうでしょ。そんなふうにお読みになっていますか、皆さん。この背景というか、情景というのはそういうもので、一つひとつ非常に意味が深い。

そしたら今度は、その言葉を受けて更に烈しいことをイエスは言っておられる。こんなことを言えば、殺されるのはしょうがないですわ、イエスは憎しみを買って。

46イエス言い給う『なんじら教法師もなる哉。なんじら担い難き荷を人に負せて、自ら指一つだに其の荷につけぬなり。

それを肩代わりしてってやろうなんていう気持は全然ないではないかと。そういう言葉なんですね。私はこれを読んだら、痛快でしかたがない。だいたい、宗教家というのはこんなのが多い。立派なことを言って、人々をさんざんきつけておきながら、自分は一体いかなる者なのかという、そんな感じを受けました。

「なんじら教法師も禍害なるかな。担い難い荷物を人に負せながら、自分では指一本触れようとはしない」

と。

いや、今日はね、高田馬場へくるのに、私はいろいろな方に助けてもらいましたよ。荷物を持っているでしょ、そうすると、階段の番をしているおじさんが寄ってきて、荷物を担いでくれる。そうかと思うとまた、全然知らない人がパッと寄ってきて、荷物を持ってくれる。「ああ、日本も捨てたものではないな」と思った。白髪の年寄りくさい、腰のまがった老人が重い荷物でフウフウやっている。放っておけようかというわけです。本当に昨日、今日といろんな方にそういう慈しみあふれる行いに私は感動してここへ来ているんですよ。きっと、そういう人たちは、天国へ行ったら、

「あなたはよく私を助けてくれた。私がしんどい時に助けてくれたよね」

「いや、全然助けた覚えはありませんが」

「あの奥田というのが苦しんでいた時に、あなたはその荷物を持ってあげただろ。あれは私にしたんだよ」

と、きっとキリストはそう仰る。そういうものなんですよ。パリサイ人と違うんです。貧しい人、苦しんでいる人に対して、水一杯さしあげる。荷物を持ってあげる。

「それは私に対してしているんだよ」

と、そう仰るのがマタイ伝26章にちゃんと出てきます。羊と山羊を分かって、羊はそうやって親切なことをやった人、山羊は偽善者的な人。

このパリサイ人はどうもその、

「背負い難い荷物を人に負せながら、自分は指一本触れようとはしない」

というなんです。さんざんそのあともキリストはそういうパリサイ人を非難しておられます。

47なるかな、汝らは預言者たちの墓を建つ、之を殺しし者は汝らの先祖なり。48げに汝らは先祖のをしとする証人ぞ。それは彼らは之を殺し、汝らは其の墓を建つればなり。49この故に神の智慧、いえるあり、われ預言者と使徒とを彼らに遣さんに、その中の或者を殺し、また逐い苦しめん。50世のより流されたる凡ての預言者の血、51即ちアベルの血より、祭壇と聖所との間にて殺されたるザカリヤの血に至るまでを、今のにすべきなり。然り、われ汝らに告ぐ、今の代は糺さるべし。

あのカインとアベルの物語があります。神さまはアベルの献げ物を喜ばれて、カインの献げ物を顧みられなかった。そこでカインはアベルを妬んで殺してしまったという物語が旧約聖書の創世記に出てきます。そのアベルの血より、そして祭壇と聖所の間で殺されたザカリヤの血まで、いわば神の義人たちをいろんな形で迫害したり殺したりしてきた。それは必ず最後の審判の時に裁かれる時がくるということを言われた。それから、

52禍害なるかな教法師よ、なんじらは知識の鍵を取り去りて自ら入らず、入らんとする人をも止めしなり』（ルカ11･37～52）

つまり、彼らは知識人なんです。知識人で、知識を独占していて、それをみんなに分かち与えようとしない。審くばかりで。へたしたら、宗教家もそういうことになりがちです。

# ●無教会出身

かつて、小池先生は無教会出身ですが、無教会というのは学者の集まりなんです。ヘブライ語、ギリシア語ができる。それを誇る。そして聖書に精通している。そういう賢い方が多い。だいたい、学校の先生が多い。そういう方々の中で小池先生は苦しかったらしいですね。知識は得られる。けれども、心の解決には全然なっていない。いているときに、手島郁郎という人に出会って、そこで聖霊のバプテスマを受けた。それから新しいを歩まれる。そしたら今度は逆に、裁かれる立場になってしまった。だから、小池先生にとっては、自分を生み出してくれた無教会は、ありがたいんだけれども、実は聖霊を否定して、そういった新しく生まれた小池辰雄を迫害したという、そういうものを背負ってこられました。だから、昔の『の愛』誌というのをご覧になりますと、あれは無教会との戦いなんです。それは本文ではなくて、うしろの「武蔵野だより」の中にさんざん書いておられますから、ああいう所をお読みになれば、いかに先生が無教会の方々から批判されて、それと戦っておられるか。特に手島さんと手を組んでから、さんざん批判されています。そういう背景があります。

だからこの、

「知識の鍵を取り去って、自分が入ろうとしない、また入ろうとする人にストップをかけている」

というのは、へたすると、知識人キリスト者というのはこういう姿になりがちです。

「ヘブライ語やギリシア語ができなかったら、聖書はわかりませんよ」

というのが、ずっと無教会の先生方の言うことだったらしい。これは私は「らしいです」と言うしかない。でも、御霊のクリスチャンはそんなものではない。

「きものき者に隠して、に顕したまえり。感謝いたします」（ルカ10･21）

と、そういう祈りをキリストはルカ伝のところで仰っていますでしょ。

# ●弟子たちの派遣

ルカ伝では、キリストは弟子たちを派遣される。二通りある。十二弟子を選んで、そして弟子たちを遣わされるという、それが９章に出てきます。

「１イエス十二弟子を召し寄せて、もろもろの悪鬼を制し、病をいやすと権威とを与え、２また神の国をえしめ、人をさしむる為に、之をさんとして言い給う」（ルカ9･1～2）

と。しかもだいたい、二人ずつペアで遣わしておられるのが９章に出てきます。そして、弟子たちは、やったらすごい成果がありましたと、成果報告会をやっているわけです。ちょうど、オリンピックでたくさん日の丸を揚げて帰って来て、報告会をやりますね。あれみたいなことをやっているのが９章10節です。

皆さん、福音書に親しんでください。もうピンピンときてわかるように、精通してくださいね。

「10使徒たち帰りきて、其の為しし事をにイエスに告ぐ。イエス彼らをえてにベツサイダという町に退きたもう」（ルカ9･10）

そういう報告を聞いて、また町に退かれたということがあります。それから、もう一ヶ所は10章に出てきます。今のは十二弟子を遣わされたお話でしたが、10章では、

「１この事ののち、主、ほかに七十人をあげて

と書いてます。十二弟子を選ぶ前にキリストは徹夜の祈りをなさっている。徹夜の祈りをしたのちに十二弟子を選んで、そして遣わされる。それから今度は10章では、他に七十人――七十人とは相当な数ですよ――それをまたペアにして二人ずつ遣わされる。

自ら往かんとする町々へ、おのれに先だち二人ずつをさんとして言い給う、２『はおおく、は少し。この故に收穫の主に、労働人をそのに遣し給わんことを求めよ。３往け、視よ、我なんじらを遣すは、をのなかに入るるが如し。

あなた方を、これはイスラエルの中へ伝道に行かされるんです。異邦人ではない。イスラエルという自分の民の中へ遣わすにあたって、

「をのなかに放り込むようなものだ」

と、こういうことを言っておられる。同胞でしょ、イスラエルは。同胞の中にキリストの弟子を七十人――これはいうならば素人ですよ――そういうものを遣わす時に、「あなた方を遣わすのはあたかも羔を狼の中に――羔はいちばん弱い。羔を狼という猛々しいものの中に――放り込むようなものだ」と言われた。

４財布も袋ももうな。またにて誰にも挨拶すな。５の家に入るとも、先ず平安この家にあれと言え。

「まず平安をその家に祈りなさい」とか、いろいろ細かく指示を与えておられる。そして、その七十人が成果報告をやっている。それが17節です。楽しいでしょ。

17七十人よろこび帰りて言う『主よ、汝の名によりて悪鬼すら我らに服す』18イエス彼らに言い給う『われ天よりくのごとくサタンの落ちしを見たり。

イエスは、

「はい。見えてたよ。天からサタンが落ちるのが見えたよ。地上でサタンは、人を通して変なことをやって、悪事を働いている。しかし、それは霊界のサタンが天から、いわば指図して人を捕まえてやらせているだけだ。そのことが見えてたよ」

ということを言っておられます。

19視よ、われ汝らに蛇・を踏み、の凡ての力をうる権威を授けたれば、汝らをうもの断えてなからん。20されど霊の汝らに服するを喜ぶな、汝らの名の天にされたるを喜べ』

「霊が服従するからといって喜ぶのではないよ。あなた方の名前が天に録されている。これを喜びとしなさい」

と。我々は地上のことで、やれ、「病気が癒されました、治りました」「こんなことがありました、お金がもうかりました」「助けてもらいました」なんて、それは確かに感謝かもしれない。でももっと喜ぶべきは、

「あなたの名前が天に書かれている。つまり、天国人にされていることだ。それを喜びなさい」

と言われた。そしてそのあとで、

21その時イエス聖霊により喜びて言いたもう『天地の主なる父よ、われ感謝す、此等のことをきものき者に隠して、に顕したまえり。父よ、然り、此のごときはにえるなり。22凡ての物は我わが父より委ねられたり。子の誰なるを知る者は、父のになく、

イエスは自分のことを「人の子」と言われた。「私は何者か」という本質を知っているものは父なる神さま、あなたの外になく、

父の誰なるを知る者は、子また子の欲するままに顕すところの者の外になし』

そうやって感謝の祈りを捧げられた。それから密かに言われた、

23かくて弟子たちを顧みに言い給う『なんじらの見る所を見る眼はなり。24われ汝らに告ぐ、多くの預言者も、王も、汝らの見るところを見んと欲したれど見ず、汝らの聞く所を聞かんと欲したれど聞かざりき』」（ルカ10･1～24）

「あなた方の見ている所を見る眼は幸いだ。今まで預言者たちも見たくて見られなかった。それをあなた方は今ちゃんと見せていただいいるんだよ、すごいだろ」

と。私たちはそういうものを見せていただいているんですよ。これはその当時の弟子だけではない。十字架・聖霊をいただいた我々はイエスが望んでおられた霊の事態、霊の次元をいただいているんだよと。

# ●霊の次元

私は今、「霊の次元」と言いました。さかんに新宿集会でも、「霊の次元、天の次元」ということを言っております。それは何かといいますと、ヨハネ伝３章にありますね、

「人、新たに生まれずば神の国を見ることあたわず。人は水と霊から新しく生まれなけば、神の国に入ることもできない。肉から生まれる者は肉である。霊によって生まれる者は霊である。風は思いのままに吹いている。その風がどこから来てどこへ行くか誰も知らない。新しく生まれる、霊から生まれる、これも同じことだよ」（ヨハネ3･3～8）

ということを、ヨハネ伝３章でニコデモとの問答で仰っている。あれは非常に大事なんです。

「神は霊なれば、拝する者も霊とをもて拝すべきなり」（ヨハネ4･24）

と、サマリヤの女との対話の中で仰っています。そして、

「人新たに生まれずば」

ということを仰っている。だから、

「人の生くるのはパンのみによるにあらず。神の口から出る一つひとつのによって生きる」（マタイ4･4）

という、その「神の言」というのも霊の言なんです。その霊の言である中味は何か。それはヨハネ伝６章に出てきます。

「我をくらえ、我を飲め」

と言われた。あの６章では繰り返し、

「私を食べろ、私を飲め。私と一つになれ」

と、もうくどいほど言っておられる。

「モーセが与えられたパン、がきたり、マナがふってきたり、いろいろしました。でも、みんな死んだ。どんなにモーセが素晴らしいことをやったとしても、それは一時的なものだった。永遠ではなかった。でも、私というパン、私は生命のパンである。天から降ってきた生命のパンである。私を食べる者は永遠に生きる」

と繰り返し言っておられるのはヨハネ伝６章です。しかもヨハネ伝６章63節のところに、

「63活かすものは霊なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、霊なり、なり」

と。ああいうところはしっかりつかまえていただきたい。

聖書というのは、漫然とダラダラ読むのではなくて、ポイントをつかまえて、しかも、ポイントとポイントががっているところがある。それをぎにつないでいく。そういう形で関連付けて立体的に読んでいく。そういう読み方をぜひなさってください。それは一人ひとりが発見していくものだと思います。皆さんそれぞれに自分独自の聖書の読み方をつくりだしていってほしい。

それを持ち寄って集まってくるのが集会なんです。集会は、誰か一人が素晴らしいことをしゃべって、聴いている者が「ハッハ～ァ」と畏れかしこんで聞く（笑）、そんなのではないですよ。「聖書を生きる、キリストを生きる」と、こないだ御殿場でやりました。それを日頃皆さんがなさっていて、

「この一週間こんな凄い体験をしました。こんな凄い御言にでっくわしました。もう心が躍っています」

と。そういうものを携えて持ってくる。十人が一つずつ持ってきたら、十倍になりますね。それが私は集会だと思っている。それは皆さんがお互いにそれを分かち合うとともに、真ん中に立っておられる復活されたキリスト、そのキリストに対する捧げ物である。それが私は生きた集会だと思う。そういう集会をやってください。

小池先生のお話を皆さん聴いておられますね。これは呼び水だと思ってください。小池先生のお話を聞いて、「ああよかった、今日はもうよかった。もうめでたい、めでたい。サヨナラ」で帰ったら、それを繰り返してもダメなんですよ。それは呼び水ですから。小池先生のお話を呼び水にして、皆さんお一人お一人が、真ん中に立っていらっしゃる復活のキリスト、御霊のキリスト、そのお方と一つとなって、

「ありがとうございました。この集会にきて、また甦りました。これから一週間、どうぞ、あなたと一緒に歩ませてください。そして、来週集まるときは、また一段と素晴らしい姿になって、ここに集わしてください」

と、それの繰り返し。それが私の理想とする集会なんです。だから、語り手はどこまでも誘い水を出しているだけです。

「この水を飲む者はまた渇かん。されど、わが与える水は永遠の生命の泉となって湧きあがる」

と、サマリヤの女に仰った。そういうふうにして、キリストが、汲めども尽きない生命の水を私たちに与えてくださる。そんなふうに思います。

# ●求めの切なるにより

それからルカ伝11章、これは祈りのところ。「求めの切なるにより」ということが８節に出てきます。

「５また言い給う『なんじらの中たれか友あらんに、にその許に往きて「友よ、我に三つのパンを貸せ。６わが友、旅より来りしに、之に供うべき物なし」と言う時、７かれ内より答えて「われを煩わすな、戸ははや閉じ、子らは我と共ににあり、ちて与え難し」という事ありとも、８われ汝らに告ぐ、友なるによりては起ちて与えねど、求の切なるにより、起きて其の要する程のものを与えん。」（ルカ11･5～18）

「もう寝ているんだから、勘弁してよね」

と。友だちだからといって、起きて与えないけれども、うるさくてしょうがないから、

「求めの切なるにより、必要なものを与えるだろう」

この「求めの切なるにより」というのと、さきほど申しました18章の不義なる裁判官の、

「もううるさくてしょうがない。だから、しぶしぶでも聞いてくれるよ」

というのが18章ですね。

「１また彼らに、せずして常に祈るべきことを、にて語り言い給う２『或町に、神を畏れず人を顧みぬ裁判人あり。３その町にありて、そのにゆき「我がためにを審きたまえ」と言う。４かれ久しく聴き入れざりしが、其ののち心の中に言う「われ神をれず、人を顧みねど、５此の寡婦われを煩わせば、我かれが為に審かん、然らずば絶えずりて我を悩まさん」と』６主いい給う『不義なる裁判人の言うことを聴け、７まして神は夜昼よばわる選民のために、たとい遅くともに審き給わざらんや。８我なんじらに告ぐ、かに審き給わん。されど人の子の来るとき地上に信仰を見んや』」（ルカ18･1～8）

「気落ちせずして常に祈らないではいられない。これが祈りだ」

ということを言われた。この不義なる裁判官は、もううるさくてしょうがないから、仕方なしに、この寡婦の訴えを聴いてやった。神さまはそんな不義な裁判官とはちがう。

「まして、神は夜昼呼ばわる選民のために、たとえ遅くとも遂に審き給わざらんや。速やかに審き給う。しかし、私が地上に再び現れるとき、地上に信仰は本当に残っているだろうか」

と言われた。ですから、この18章のところと今の11章がまた繋がっている。

それから33節、「身の灯火は眼なり」というところ。これはマタイ伝では山上の垂訓のところにまとめられているのが、こんなところに出てきている。それから、食事の手を洗う洗わないということ。それから、献金のこと。そして、今日の12章というところへ辿りつきましたので、これから12章を見ていこうと思います。

# ●身と霊魂とをゲヘナにて滅し得る者

「１その時、無数の人あつまりて、群衆ふみ合うばかりなり。イエスまず弟子たちに言いで給う『なんじら、パリサイ人のパンだねに心せよ、これ偽善なり。２われたるものにれぬはなく、隠れたるものに知られぬはなし。

そうですね、今でも政治の世界でも何でも、隠していたものがどんどん現れてきてます。阿部さんの奥さんがからんだという、森友事件ですか、ああいう世界でもやはり次々、悪事露顕ということが出てきますよね。それをちゃんとキリストは言っておられる。

「われたるものにれぬはなく、隠れたるものに知られぬはなし」

と。こうやって全部、神さまはお見透しなんだよと。人間をごまかしても、神さまはごまかすことはできないんだからねと、そういうことを仰った。

大事なことは次の４節です。これは私は大好きな言葉です。

４我が友たる汝らに告ぐ。身を殺して後に何をも為し得ぬ者どもをるな。

この頃、殺人犯がいっぱいいます。19人を殺したとか、ちょっと変ですよね。いろんな殺傷事件があとをたちません。けれども、彼らのできることは、肉体を殺すことまでしかできない。それ以上のことはできない。だから、そんなものどもを恐れるなと。では、誰を恐れるのか。

５懼るべきものを汝らに示さん。殺したる後ゲヘナに投げ入るる権威ある者を懼れよ。

神さまです。神さまは肉体を滅ぼすことができなさるだけではなくて、霊魂をも地獄へ投げ込む、そういう権威をお持ちだ。それを懼れなさいと。

やはり、人間というのは、そういう神さまの世界があるということを知らなければなりませんね。この世で悪事を働いて、それは人にはごまかしがきいても、神さまの前ではごまかしがきかない。たとえ自分の肉体が、仮に裁判で死刑の宣告を受けて、死刑で命を失っても、それですまない。霊魂というもの、霊魂が地獄へ落ちたら大変なんだ。

だから、あの十字架の片一方の盗賊は、

「私はさんざん悪いことをしてきました。だから、こうやって十字架にかけられているのは当たり前のことです。でも、あなたはちがいます。どういうご縁か、この私の最後の、この世で命を失う最期の時に、あなたという素晴らしいお方とご一緒できた。もうそれだけで充分です。御国にお入りになる時に、私のことを覚えてください」（ルカ23･40～42）

と言った。イエスは、

「なんじ今日、我と共にパラダイス！」（ルカ23･43）

と言われた。だから、彼の魂はキリストに抱かれて天へ昇って行ったわけです。もう片一方の盗賊は、イエスをさんざん悪口言いましたから、ああいうのは地獄へ行くよりかしょうがない。それをここにも、

「身を殺したるのち、それ以上のことをできない、そういう人間どもの仕打ちはどうでもいいんだ。殺したのち、地獄へ投げ込む権威あるお方、神さま、そのお方を懼れかしこみなさい」

と言っておられる。

われ汝らに告ぐ、げに之を懼れよ。６五羽の雀は二銭にて売るにあらずや、然るに其の一羽だに神の前に忘れらるる事なし。７汝らの頭の髮までもみな数えらる。懼るな、汝らは多くの雀よりも優るるなり。」（ルカ12･1～6）

と。「雀よりもはるかに素晴らしい」というようなことを仰いますと、これはマタイ伝の山上の垂訓のところに出てますね。マタイ伝10章28節、

「28身を殺してをころし得ぬ者どもを

これは人間たち、

るな、身ととをゲヘナにて滅し得る者をおそれよ。29二羽の雀は一銭にて売るにあらずや、然るに、汝らの父のなくば、その一羽も地に落つること無からん。30汝らののまでも皆かぞえらる。31この故におそるな、汝らは多くの雀よりもるるなり。

多くの雀たちよりもあなた方は素晴らしい存在として神さまに顧みられているのだからと。そう仰ったのちに、

32されどそ人の前にて我を言いあらわす者を、我もまた天にいます我が父の前にて言い顕さん。33されど人の前にて我を否む者を、我もまた天にいます我が父の前にて否まん。」（マタイ10･28～33）

当時は、イエスという方は世間では認められていませんから。特にパリサイ人とかそういう宗教家たちからは迫害され異端視される立場だったから、イエスを告白するということは大変なことだった。でも、それを恐れないで告白するということは大事だと。

# ●自己紹介でキリストを告白する

今だったら、「自分はクリスチャンです」と言うのはそんなに恥ずかしいことではありません。でも、戦時中は大変だった。

「天皇が大事か、キリストが大事か、どっちなんだ！」

といって、さんざん苦しめられたということを聞いています。そういう時に躓かないで、ハッキリとキリストを告白する。

「そうでなければ、私も知らないと言うよ」

と。だいたい、キリスト教の歴史は迫害の歴史が多いですものね。長崎の二十六聖人というのもそうでしょ。いろいろ日本でも、徳川時代に迫害されました。それは徳川家からすれば、宣教師たちはキリスト教を手段にして日本を属国にするのではないかという心配をいだいたんですね、為政者としては。それでキリスト教を弾圧したという、ある面ではやむを得ない面もあったでしょうけれども。本当に純粋に魂の救いだけをもたらしたならよかったんだけれども、大体、中国でもどこでも、キリスト教の宣教を一方でやりながら、そこを自分たちの属国にしてしまうという、そういう面がありましたよね。それは不幸な歴史だと思う。

まぁそれはそれとしまして、今はそういった迫害は何もありません。憲法のもとで信教の自由というのが保証されています。そういうときだからこそ、我々は大胆にキリストを告白していかなければなりません。にもかかわらず、我々がもし、いろんなことを理由にして、キリストを人々の前で否んだら、

「キリストもあなた方のことは知らないと言うよ」

という。信仰を告白するというのは、日本の社会ではとても難しいことだと私は思う。私はよく、学生とか新しい社会人になる人に言うんです。

「初めて、知らない所へ入って行って自己紹介する時に、そのときにハッキリとキリストを告白しておきなさい。そうしたら、あとが楽ですよ。途中から、『いつ告白しよう、いつ告白しよう』とやっていたら、ついに機を逸しますよ」

と。「何で今まで黙っていたのか」と言われる。だから、一番初めに自己紹介の時に、

「私は肉によれば……云々。しかし、霊によれば、イエス・キリストによって新たに生まれたもの、キリスト者です」

ということをハッキリ告白する。そうすると、いろんな人がその後、尋ねてきます。

「あなたは、カトリックですか、プロテスタントですか？」

「いえ、どっちでもありません」

「では、無教会か？」

「いえ、無教会でもない」

「それでは何か？」

「キリスト直結です」

「どうして、そうなったのか？」

「小池辰雄というのがいまして、それから奥田昌道というのが出てきまして、それで今、こういう形でやっているんですよ」

と。まぁそういうことで、いろいろ話のきっかけができあがるんです、初めに自己紹介をやっておきますと。それをやらなかったら、チャンスを逸する。そういうことで、皆さん、ぜひ新しい所で自己紹介をする時には、

「肉によれば……。しかし霊によればキリストに属するもの……」

なんて（笑）、パウロ式にやってくださいね。

それから、キリストを告白することによって波瀾万丈になる。まず家庭の方で分裂が起こる。だいたい、日本は仏教の家庭が多いですから、そこでキリスト者が出てくると、まず仏壇を拝まなくなります。それで、「不孝者！」といって、そこで喧嘩が起こる。お墓の問題があります。いろいろそういった、仏壇、お墓、祖先のり、そんなことで、家族の中から一人キリスト者が生まれますと、そこで分裂が起こります。そこで妥協してはならない。

特にお嫁さんというのは気の毒ですよね。昔流にいいますと、旦那の家に入るという、家の格式に従わなければならない。家のしきたりに従わなければならない。現代だってそうですよ。天皇家に入る人は気の毒だと思う。天皇家のしきたりに従わなければいけない。だから、美智子さんは大変だったと思うんですね、カトリックの方でしょ。曾野綾子さんというお友だちがいて、ずいぶんいろいろアドバイスなさったと私は思いますけれども。そういう天皇家に入ると、天皇の祖先を拝むということで、従わなければならない。しかも、片一方では、自分はクリスチャンであるという、その立場を貫かなければならない。だから、宗教的にも、それから夫婦という面では夫をたてるという役割があります。そういう非常に板挟みの中で苦しい生活をなさったのではないか。だから、一時的に非常に精神的に辛い立場になられたこともありましたね。そういうことをどれだけの人がちゃんと分かってあげているか。私は大変なご苦労だったと思います。しかし、あの天皇家のしきたりに従わないということは、始めっから天皇家に入らないという決断を求められたはずなんです。入った以上はやはり従わなければならない。その板挟みの苦しみがあっただろうなと思います。

では、現在の天皇はどうなのかと。雅子さんですね。元外交官でしょ。だから、トランプが来ようと何が来ようと、英語でペラペラ自分でもしゃべるから、あれは強いですね。けれども、天皇家の中で大変だろうなと私は思う。「私は雅子を守ります」と、皇太子時代に約束された。そういうドラマがこれから始まっていくんですよ、令和の時代は。まぁそういう私は見方をしております。

# ●水一杯にても与うる者

キリストはここで、「分裂が起こる」と言う。しかし、分裂が起こった時に妥協してはならんと。

「34われ地に平和を投ぜんためにれりと思うな。平和にあらず、ってを投ぜん為に来れり。35それ我が来れるは、人をその父より、娘をその母より、嫁をそのより分かたん為なり。36人のはその家の者なるべし。37我よりも父または母を愛する者は、我にしからず。我よりも息子または娘を愛する者は、我に相応しからず。38又おのが十字架をとりて我に従わぬ者は、我に相応しからず。39生命を得る者はこれを失い、我がために生命を失う者はこれを得べし。」（ルカ12･34～39）

「自分の命、この世の命を惜しむあまり、十字架を、キリストを捨てるようなことでは本当の生命は得られない。私のために命を失う、そういう人は本当の生命をいただくんだよ」

と仰った。それからもうひとつ、うれしいことを言ってます。

「42凡そわが弟子たる名の故に、この小き者の一人に冷かなる水一杯にても与うる者は、まことに汝らに告ぐ、必ずその報いを失わざるべし」（ルカ12･42）

あなた方クリスチャンたちを受け入れて、冷やかな水を一杯飲ましてくれる者は――私流にいうと、重い荷物を持って苦しんでいそうな、この年寄りを顧みてくれた者は――天国で必ずその報いを受けると、ちゃんと約束されている。私に親切にしてくれた人は、私がクリスチャンだからやってくれたはずはないと思う。そんなことは分かりませんから。けれども、哀れな老人がおると思って、近よってきて重い荷物を担いでくれた。それは必ずその報いを受けるよと、そういうことを約束なさっています。

ですから、人に親切にすることは非常に大切なことなんです。人が苦しんでいるのを見て、同情して、何とか手をさしのべる。「同情」というのはドイツ語で「ミットライデン」という。「ライト」というのは苦しみで、「ミット」というのは「共に」なんです。「人と苦しみを共にする」というのが「同情」という日本語で訳されている。痛みを共にする、分かちあう。これが社会を築いていくうえで一番グルント、基礎ではないか。家庭におきましても。およそ人の集まる所でお互いに痛みを分かちあう、担いあう、そこから始まってくるように思う。また、一人が非常に素晴らしいことがあれば、それをまた皆さんの喜びとする。これはもっと素晴らしいかもしれませんが、もっともっと底辺にあるのは、痛みを分かち合うという憐れみの気持だと思う。

「善きサマリヤ人」の譬え話もそうでしょ。

「強盗に襲われて半死半生で苦しんでいる。そういう倒れた人を見て、宗教家は遠くを通って行った。

には親切にしなければならない。でも隣人でなければ放っておけばいい。だから、隣人にならないためにわざと遠くの路を通って行った。これが宗教家です。それに対して、

サマリヤ人は近づいて行って、そして傷の手当をし、旅館へ連れて行って、そして旅館の主人に介抱を頼んで、「私はこれから旅立って行くけれども、帰りにまた寄るから、それまでの間、この人を面倒みてやってね」と言って、デナリ二つを置いて行った。

という。それに対して、

「誰がこの人の隣人となったと、あなたは思うか」

と、パリサイ人に聞かれた。

「はい、親切なことをしたそのサマリヤの人です」

「だったら、あなた方も同じようにしなさい」」（ルカ10･30～37）

と、キリストは言われた。キリストの仰っていることは非常にわかりやすい。ゴタゴタ言っておられない。でも、そこに本当に隠された奥義があるように思います。

それがここに42節に、

「42凡そわが弟子たる名の故に、この小き者の一人に冷かなる水一杯にても与うる者は、まことに汝らに告ぐ、必ずその報いを失わざるべし」（マタイ10･42）

と、これがマタイ伝の10章でした。

それからまたルカ伝の12章にもどります。12章で皆さんにとって大事なことは、人の前で告白しなさいということ。

「８われ汝らに告ぐ、凡そ人の前に我を言いあらわす者を、人の子もまた神のたちの前にて言いあらわさん。９されど人の前にて我を否む者は、神の使たちの前にて否まれん。

しかも、非常に大事なことを言われました。

10凡そ言をもて人の子に逆う者は赦されん。されど聖霊をすものは赦されじ。

「言葉で私に逆らう者は赦される。しかしながら、聖霊をすものは赦されない」

と。いかにイエスが聖霊という、神さまから来ている霊を尊ばれたか。ナザレのイエスは、聖霊がうちに宿っていらっしゃるにしても、聖霊は別人格なんです。天に行かれてからは、イエスは聖霊の姿で私たちの中に宿ってくださる。助け主、真理の御霊です。ヨハネ伝14章から16章に出てきます。けれども、生きていらっしゃる時のイエスという方にとっては、聖霊は自分の外にいらっしゃる別なる霊。これは神さまからのき霊だから、

「人間イエスをボロクソに言ってもいいよ、けれども、聖霊をけがす罪は赦されない」

とハッキリ言っておられます。それがここです。

それから、キリストを告白する時にみんな勇気がいる。その時に大胆に告白すれば、どういうふうに弁明するかは全部、聖霊が教えてくださるからという。これも大事なことです。人の前にキリストを告白する時に、じ気づくことはないよと。天にいらっしゃる父なる神、そしてまたキリストは放っておかれない。そうでしょ。自分の子分が人々の前で証する時に、「ああもう、乗り移って助けよう」となさるわけです。よく、「子どもの喧嘩に親が出てくるな」といいますけれども、子どもが人々の前で告白するのにドギマギしてしどろもどろでいたら、「さぁ、助けに行こう」というので、聖霊が来て助けてくださる。そういうお気持だと思う。

11人なんじらを会堂、或は、あるいは権威ある者の前に引きゆかん時、いかに何を答え、または何を言わんと思い煩うな。12聖霊そのとき言うべきことを教え給わん』（ルカ12･8～12）

と、ちゃんと書いてありますね。

# ●己がために宝を天に積め

それから次はおもしろいことが書いてあります。これはルカ伝にしか出てこない。

「13群衆のうちの或人いう『師よ、わが兄弟に命じて、嗣業を我に分かたしめ給え』14之に言いたもう『人よ、誰が我を立てて汝らの裁判人また分配者とせしぞ』

まず出だしが、キリストをつかまえて、「遺産分割をやってください」と。キリストは、「私は遺産分割人でない」と。

今でいうと、家庭裁判所です。調停とか何とかで、相続争いだの、すごいんですね、相続争いというのは。今まで仲よかったものが喧嘩する。全然知らなかったやつが、知らん間に現れてきて、「自分も相続人です」と言って、相続の分割に加わってくるとか。仲よかった兄弟たちの中で分裂がおこり、知らなかった親族が現れてきて、遺産分割でまた争いになる。これが世の常なんです。当時も、イエスに対して、「どうぞなんとか、調停をお願いします」とやって来た。

「自分は調停人ではない」

と言って断っておられる。それがこの箇所ですね。そして、

15かくて人々に言いたもう『慎みててのをふせげ、人の生命はの豊かなるには因らぬなり』

と。トランプさんというのは、たしかに大金持ちなんですね。アメリカでは１％の大金持ちがアメリカの富みの大部分を占めているとか聞く。向こうは極端なんです。そのかわり、カーネギーとか、大金持ちはみなそれを世の中のために差し出した。寄付するんです。寄付の文化が育っている。戦後、日本の学者がたくさんアメリカに留学しました。フルブライト留学生、それは全部そういった大金持ちが資金を出して、日本の留学生を招いている。私はドイツの方に行ったんですけれども。そういうことで、向こうは金持ち社会だけれども、本当の金持ちは、自分のお金を社会に還元するという、それがひとつの美徳で誇りであったと思う。今はどうなっているか知りません。今は貧富の差がひどくて、しかも向こうは移民の社会ですから非常に複雑で、広すぎて、大変な社会だと思いますね。

「人の生命は所有の豊かなるには因らぬなり」

と。それから、大金持ちの話が出てくる。

16またを語りて言い給う『ある富める人、その畑豊かに実りたれば、17心の中にりて言う「われにせん、我が作物をめおくなし」18遂に言う「われくさん、わが倉をち、更に大なるものを建てて、にわが穀物および善き物をことごとく蔵めん。19かくてわがに言わん、霊魂よ、多年を過ごすに足る多くの善き物を貯えたれば、安んぜよ、飲食せよ、楽しめよ」

大豊作があって、

「さぁ困った、どうしよう。そうだ、でっかい蔵を立てよう。収穫物を全部、そこへしまいこむ。そうすれば、もう一生分、自分は左うちわで生きていくことができる」

と言って、彼は喜んだ。私だったら、どう答えるか。

「左うちわはあかん。肥満になって糖尿病で死んでしまう。だから、貧しい者に施しなさい」

と私ならそう言う。イエスはもっとひどいことを言うでしょ。

「今晩、お前の命はなくなるよ」

と言われた。イエスは残酷でしょ。私の方がまだよっぽどましですよ。お金持ちで左うちわは、肥満で糖尿病というのは統計的に証明されている。だから、あなた、皇居の周りを走りましょう。そして、そのあなたの穀物をみんなに分かち与えて――昔、ヨセフがやった。エジプトの宰相になって、飢饉が続いたときに、それまでにたくさん貯えて、それをみんな民衆に分かち与えた――それと同じように、それをやりましょうよと。私なら、せいぜいそのくらいだけれども、イエスはもっとひどいよね。この人が、

「魂よ、長年も過ごすに足る善き収穫物を貯えた。さぁ、左うちわで、安んぜよ、飲み食いせよ、楽しめよ、おらが春だ」

とこう言っている。

20然るに神かれに「愚なる者よ、なんじのとらるべし、さらば汝の備えたる物は、誰がものとなるべきぞ」と言い給えり。21己のために財を貯え、神に対して富まぬ者は斯くのごとし』」（ルカ12･13～21）

「己のために財を貯え、神に対して宝を持たない者はこういう姿だ」

ということを言われた。これに相当するところは、マタイ伝でいいますと、あの山上の垂訓の所に出てくる。そことちょっと比較してみましょう。マタイ伝６章19節から、

「19なんじら己がためにを地に積むな、ここはととがい、うがちて盗むなり」（マタイ6･19）

と。ルカ伝をもう一度みますと、

「己のために財を貯え、神に対して富まぬ者は、この愚かな豊作で喜んでいるこの人のような姿だよ」

と仰る。マタイ伝では、

「自分のために宝を地に積むな。自分のためにというならば、天に積みなさい」

と。まぁ「己がために」と言っている。

「自分のために積むのはわるくない。しかし、積む場所は地上ではまずい、天に積みなさい。あそこは盗人が来ないから」

と。そして、

「21なんじの財宝のある所には、なんじの心もあるべし」（マタイ6･21）

と。これですね。皆さん、宝はどこにありますか。株をやっていらっしゃる方は、新聞を見たら、株の値動きにまず朝、目がいくそうですよ。皆さんの中にはそういう方はいらっしゃらない？　だいたい、株を持つというのは金持ちがすることですよね。私の知っている方でそういう方がいらっしゃいまして、もう毎朝そういうことに非常に熱心だったということを聞いていました。私はお気の毒だなと思いました。

「20なんじら己がために財宝を天に積め、かしこは蟲と錆とが損わず、盗人うがちて盗まぬなり。21なんじの財宝のある所には、なんじの心もあるべし」（マタイ6･20～21）

だから、「天に積め」と。そして「宝のある所に心もあるだろう」と。そうなんです、あなたの宝は何ですか。あなたの宝はどこにありますか。宝のある所に心もある。

だから、その宝は見える物ではなくて、見えないもの。たとえば、人にたくさんした親切とか、いろいろなそういった人に対する愛の行い、それは全部、天に貯金されているんです。そしてそれが終りの日になったら、ちゃんとそれに対する報いが与えられるという、それがマタイ伝26章に、羊と山羊に分けて、羊に対してのご褒美、山羊に対しての審き、それが26章のところに出てきてます。

それから、

「22身のは目なり。

と。これもルカ伝でさっきありましたね。

この故に汝の目ただしくば、全身あかるからん。23されど汝の目あしくば、全身くらからん。もし汝の内の光、闇ならば、その闇いかばかりぞや。24人は二人の主に兼ね事うること能わず、或はこれを憎み彼を愛し、或はこれに親しみ彼を軽しむべければなり。汝ら神と富とに兼ね事うること能わず」（マタイ6･22～24）

つまり、神と富み、その両方を両立させることはできない。神と富みの二刀流はダメですよと言われた。

「そしたら、どうしたらいいのですか。富みがなければ生きていけないではないですか。ある程度の蓄えがなかったら、この世で生きていくことはできませんよ」

「まぁそれはもっともだけれども、それはあなたがることではない。あなたのためにご心配してくださる方がいらっしゃるのだから」

と。「異邦人」という言葉が出てきます、ルカ伝でもマタイ伝でも。異邦人とは何か。「神さまを知らない人」を異邦人といいます。何も国籍がイスラエルか、イスラエルでないか、そういうことではない。異邦人とは、神を知らない人たち。これが神さまの目からみたら異邦人。神さまを知っている人は、国籍が何であろうと、神の民、天国人です。

# ●まず神の国と神の義とを求めよ

天国人は、神さまがすべてご心配くださるから、まず求めるべきは、

「まず、神の国と神の義とを求めよ」（マタイ6･33）

と。マタイ伝６章33節。

「まず、神の国と神の義を求めなさい」

と。神の国と神の義、これはキリストをいただいた我々からすれば、「キリストを求める」ことなんです。キリストご自身が神の国であり、神の義なんです。そういうふうに読み替えてください。だから、

「まず、私（キリスト）を求めてきなさい。そうしたら、必要なものは全部、私が責任をもってあなたのために提供するから。まず求めるべきは私だよ。私があなたに何を願っているか、私の思いは何であるか。それを大事にしなさい。そうすれば、あなたの生活は正しくなるから」

と。それがこのマタイ伝６章25節からのところです。

まずマタイ伝を読んでみますと、

「25この故に我なんじらに告ぐ、何をい、何を飲まんとのことを思い煩い、何をんとのことを思い煩うな。生命はにまさり、体は衣にるならずや。26空の鳥を見よ、かず、刈らず、倉に收めず、然るに汝らの天の父は、これを養いたもう。汝らは之よりも遙かに優るる者ならずや。27汝らの中たれか思い煩いて身の一尺を加え得んや。28又なにゆえ衣のことを思い煩うや。野の百合は如何にして育つかを思え、労せず、紡がざるなり。29されど我なんじらに告ぐ、栄華を極めたるソロモンだに、そのこの花の一つにもかざりき。30今日ありて明日炉に投げ入れらるる野の草をも、神はかくい給えば、まして汝らをや、ああ信仰うすき者よ。31さらば何をい、何を飲み、何をんとて思い煩うな。

この「何を着ようか」ということで申し上げますと、皆さん、パーティに行かれるときに、「３０着ほどあるうちからどれにしようか」なんて、そうじゃないんですよ。明日着るものがない人たちに向かって言っている。もうボロボロのボロしか持ってないそういう人たちに対して、「心配いらんよ」ということを仰った。そこを間違わないでください。

32是みな異邦人の切に求むる所なり。汝らの天の父は、凡てこれらの物の汝らに必要なるを知り給うなり。33まず神の国と神の義とを求めよ、さらば凡てこれらの物は汝らに加えらるべし。34この故に明日のことを思い煩うな、明日は明日みずから思い煩わん。一日の苦労は一日にて足れり。」（マタイ6･25～34）

その日の食にもこと欠く人、明日の着るものにも困っている人。それは異邦人なら――つまり神さまを知らない人なら――そのために心を砕くだろう。しかしながら、あなた方はそうじゃない。天の父なる神さまはすべて、あなた方に必要なもの、体を養い命を養うものは何であるかはちゃんとご存知である。食べ物のこと、着るもののこと、すべてご存知である。だったとしたら、あなた方がまず第一に求めるべきものは神の国と神の義、今ふうにいうならば、キリストご自身。キリストご自身の中に神の国はあります。キリストご自身が神の義です。ですから、「まず神の国と神の義を」と書いてあれば、それは、

「まず私（キリスト）を求めてきなさい。そうすれば、必要なものはすべて添えて与えられる。だから、明日のことは思い煩わなくていい。明日は明日自身が思い煩うだろう。一日の苦労は一日で充分だ」

と。私はこの言葉に触れたとき、何と慰め深い、ありがたい言葉かなと思った。本当に感激、感動、感謝、それでしたね。キリストを知らなければ、とてもこんな心境にはなれなかった。すべては自己責任で、自分が、しかも自分だけではなく、自分の家族も、自分にぶらさがっているいろんな人たちのことも全部、自分が背負わなければならないと思っておりました。しかし、それだけの力がない、財力がない。何もないくせに、責任だけは人一倍背負っていた、そういう私だったんです。それでれていたときに救われた。この御言にぶつかった。

「そうだ。責任を持ってくださる方がいらっしゃるんだ。お前のすることは、キリストをひとすじに求めていく、キリストの御意だけを求めていく、それに徹していけば、お前が背負っていた荷物、責任を全部、イエスさまが引き受けてくださる。大丈夫だよ」

と。つまり、荷物を全部、キリストに預けたんです。

「すべて労する者、重荷を負う者、我にきたれ。我なんじを休ません」（マタイ11･29）

と、あのマタイ伝11章29節に出てくるでしょ。

# ●わが子イエスよ、ぶつぶつ言うんじゃないよ

その前にイエスはどういうことを言っておられるか、20節を見ましょう。

「20にイエス多くのあるを行い給える町々の悔改めぬによりて、之を責めはじめ給う、21『なるコラジンよ、禍害なる哉ベツサイダよ、汝らの中にて行いたるある業を、ツロとシドンとにて行いしならば、彼らは早く荒布を、灰の中にて悔改めしならん。22されば汝らに告ぐ、の日にはツロとシドンとのかた汝等よりも耐えからん。23カペナウムよ、なんじは天にまで挙げらるべきか、にまで下らん。汝のうちにて行いたる能力ある業を、ソドムにて行いしならば、今日までもかの町はりしならん。24されば汝らに告ぐ、審判の日にはソドムの地のかた汝よりも耐え易からん』」（マタイ11･20～24）

「ツロとシドン」というのは、硫黄が降ってきて滅びた町です。ところが、あなた方は素晴らしい御業を見ていながら、全然、それに対して悔改めもしなかったではないかと言って、力ある業を行い給える町々が悔改めないので、それを叱責し始められた。イエスはそういった不信仰な人たちを叱責なさったあと、突然、25節で、

「25その時イエス答えて言いたもう

と。これは新共同訳では、こういう言葉ではないけれども――他のドイツ語や英文をみましてもそうでないけれども――ここだけは、「答えて」と書いてある。なぜなのかはわかりません。けれども、小池先生はここをとらえて、

「その時イエス答えて言いたもうとは、何に答えたんですか」

とハッキリ仰った。「答えて」というのは、何かの呼びかけに答えているはずでしょ。そこを小池先生はつかまえて言われた。イエスは今まで人々を叱責しておられた、「コラジンよ、ベッサイダよ」と。ところが、天から慰めのみ声が聞こえてきた。

「わが子イエスよ、ぶつぶつ言うんじゃないよ。わしは分かっているんだから、大丈夫だよ」

と。まぁそういう慰めのみ声が天から聞こえてきた。その天からの慰めのみ声に対して、

「答えて言いたもう『天地の主なる父よ、われ感謝す、此等のことをき者き者にかくして、に顕し給えり。26父よ、然り、かくの如きは御意にえるなり。27すべての物は我わが父より委ねられたり。子を知る者は父のになく、父をしる者は子または子の欲するままに顕すところの者の外になし。

「あっ、そうでした。ありがとうございます。感謝いたします。奥義を、この世の知恵ある者、賢い者、大金持ち、パリサイ人、そういうご連中ではなくて、に――つまり赤ちゃんですわ――嬰児に顕してくださった。これこそ御意でございました。子を知る者は父のほかにいらっしゃいません。父を知る者は私と、また私が示してあげるたちのほかにありません」

と。そういうふうに感謝の祈りをささげて、それから、

28凡て労する者・重荷を負う者、われにれ、われ汝らを休ません。29我は柔和にして心ければ、我がを負いて我に学べ、さらばにを得ん。30わがはく、わが荷は軽ければなり』」（マタイ11･25～30）

と、こう続いていく。ですから、ここはすごく深い。一方では、イエスは自分が一生懸命に御意に従って働いてきた。骨折り損のくたびれ儲けといいます。全然、悔改めもしない。もうけしからん。怒っておられるわけです。それに対して、

「そう怒るのではないよ。わたしはお前のことをわかっているから」

と言って、天から慰めの言葉が臨んできた。そこでイエスはその慰めのお言葉、み声に答えて、

「あっ、そうでした。こういう私を受け入れないご連中ではなくて、あなたは、乳飲み子、そういった本当にたちに、霊の幼子たち、そういう者にみ国の奥義を顕そうとしてくださったんです。そうでした。もうブツブツ言うのはやめます」

と、そう言って、非常に慰めをお受けになった。そこから一転して、今度は28節に続く。だから、27節でいっぺん切れていると思う。

「ありがとうございました。本当にブーブー言ってましたけど、よくわかりました。ありがとうございます」

と、こう言って、感謝の祈りを捧げて、それから今度は、

「すべて労する者、重荷を負う者、我にきたれ」

と、こういうふうに続いている。そうしたら、何か納得でしょ、皆さん。

「ああそうか、イエスさまだって、ブーブー言われたことがあったんだ」

と。皆さんもいろいろ世の中で、世のため人のために働かれて善意でなさっても、一向に受けいれられなくて、「もう迷惑なはなしだ、放っておいてよ」なんて言われて、特にボランティア活動をなさったり、いろいろお年寄りのお世話をなさったりとか、老人ホームに行かれたりとか、そういう時は、いいことばっかりではなくて、介護者が非常に今、介護される方によって傷つけられているということをよくテレビなんかでみます。そういう人たちに対して、こういう慰めのみ声が臨んでいると、そう受けとってほしい。すべて労する者、重荷を負う者は──介護老人ホームで働く人は、労する者、重荷を負う──自分のためにではない、人のために肉体を犠牲にして、精神を犠牲にして、面倒をみていらっしゃるわけですね。

「そういう労する者、重荷を負う者、そういう人は私の所にきなさい。私はあなた方の気持をわかっているよ。自分もさんざん苦しんだよ。苦しんだ時に神さまからの慰めがあったんだよ。だから今度は、その慰めをあなた方にお分かちするからね」

と。そして、

「私は柔和にして心ひくければ、我がを負いて我に学べ。私が一緒に重荷を負うから二人三脚で行こう。そうしたら、あなたの霊魂に休息が与えられる。それが何より大事なことだ。私の荷物は負いやすい、荷物は軽いんだよ」

と。こういうふうにして、皆さんがこの世の中で、社会の中で、家庭の中で、いろんな苦しみを味わう時、荷物を背負う時、そういう時に誰も理解してくれない。むしろ逆に、「へたくそだね、もっとこうだよ」とボロクソに言われる。それに対して我慢している。そういうやりきれない気持になった時に、こういうところへ来てくだされば、

「あっそうだ。イエスさまもさんざんそうやって苦しみを味わわれた。神さまからの慰めがきた。そのときにこんな素晴らしい祈りをなさった。だったら、自分たちだって当たり前だよね。何よりもイエスさまが、私という人間の罪を贖い、罪と審きを全部引き受けて、もう私を活ける霊としてくださった。たとえ、肉体ではなおこれからもいろいろ苦しいことがあるかもしれないけれども、

「肉体を滅ぼしても魂を滅ぼすことのできないものを恐れるな」

と、ちゃんとイエスは仰っている。もう私は完全に天国人にされてしまっている。だから、御名を讃えて進むんだ。それをイエスは喜んでくださる」

と。そんなふうにして、ここの御言をご自分の生活の中での活力源として受けとっていく。そういう読み方をなさってほしいなと思います。

# ●明日のことを思い煩うな

それからまたルカ伝12章の方へもどりますと、22節から仰ったことは、マタイ伝ではさっきの６章25節からの、

「明日のことを思い煩うな」（マタイ6･34）

と言われたことが、ルカ伝ではこんな所に出てきているわけですね。

「22また弟子たちに言い給う『この故にわれ汝らに告ぐ、何を食わんと生命のことを思い煩い、何をんとのことを思い煩うな。23はにまさり、は衣に勝るなり。

マタイ伝では「空のを見よ」と書いてあるのは、ここは「」になっていますね。

24を思い見よ、かず、刈らず、納屋も倉もなし。然るに神は之を養いたもう、汝ら鳥に優るることぞや。25汝らの中たれか思い煩いて、身の一尺を加え得んや。26されば小さき事すらわぬに、何ぞ他のことを思い煩うか。27百合を思い見よ、がず、織らざるなり。されど我なんじらに告ぐ、栄華を極めたるソロモンだに、其のこの花の一つにもかざりき。28今日ありて、明日炉に投げ入れらるる野の草をも、神は斯くい給えば、て汝らをや、ああ信仰うすき者よ、29なんじら何をい何を飲まんと求むな、また心を動かすな。30みな世の異邦人の切に求むる所なれど、汝らの父は、の物のなんじらに必要なるを知り給えばなり。

「世の異邦人」とあるでしょ。つまり、神さまを知らない人を世の異邦人と言ってます。神さまを知っているあなた方はもう異邦人ではない、天国人だよと。そういうことですから、この世の「異邦人」という言い方を差別用語と受けとらないでください。神を知らない人たちは異邦人。神を知って神の子であるあなた方は天国人です。

「その天国人であるあなた方がいろんなことを心配したらどうするのか」

と。そう言っておられる。必要なことは何か。

31ただ父の御国を求めよ。さらば此等の物は、なんじらに加えらるべし」（ルカ12･22～31）

と。マタイ伝では、

「まず神の国と神の義を求めよ」（マタイ6･33）

といって、厳かでしょ。ここは、

「ただ父の御国を求めよ」（ルカ12･31）

と、なんと簡単でしょう。そういうところに、荘重なるマタイ伝と非常に庶民的なルカ伝のちがいがよく出ている。おそらくキリストはルカ伝的に仰っているのではないかと思う。あとの人たちが荘重なる響きのマタイ伝を編集して、あそこへキリストの言葉を集めてきた。そういうふうに思います。なにもマタイ伝を非難するわけではない。マタイ伝はマタイ伝の意図をもって編集されている。しかしながら、真実に近いすがたはルカ伝だろうなと思う。日常生活の中に入りこんできて、イエスは場面場面でいろんなことを仰っているわけです。だから、非常に日常生活に近い形でキリストはお話をなさっている。そういうふうに思います。

「32るな、小き群よ、なんじらにをうことは、汝らの父のなり。33汝らのを売りてをなせ。己がためにびぬ財布をつくり、尽きぬを天に貯えよ。かしこはも近づかず、もらぬなり、34汝らの財宝のある所には、汝らの心もあるべし。」（ルカ12･32～34）

これはマタイ伝と一緒ですね、

「宝のある所には心もある」（マタイ6･21）

という。

# ●寝ずに主人を待つ僕

それから次は、イエスが突然やってくるという再臨のキリストを待つ話が出てきます。いつキリストがいらっしゃるかわからない。それを例え話で、ちょうど、婚姻の席に招かれた主人が出かけて行って、その婚宴が延々と続く。徹夜の婚宴もある。でも夜明け方に突如と主人が帰ってくる。その時に寝ずの番をして、ちゃんと用意している僕たちは祝福されるというお話なんです。

「35なんじら腰に帶し、をともして居れ。36主人、婚筵より帰り来りて戸を叩かば、直ちに開くために待つ人のごとくなれ。37主人の来るとき、目を覚ましおるを見らるる僕どもはなるかな。われ誠に汝らに告ぐ、主人帶して其の僕どもを食事の席にかせ、進みて給仕すべし。38主人、夜のごろくは夜の明くる頃に来るとも、かくの如くなるを見らるる僕どもは幸福なり。39なんじら之を知れ、もしいずれの時来るかを知らば、その家をたすまじ。40汝らも備えおれ。人の子は思わぬ時に来ればなり』

大事なのは40節です。

「あなた方も心の備えをしていなさい。思わぬ時に私はやってくるよ」

と。これは再臨のキリストです。キリストが再び来たりたもう。これは使徒行伝に出てきます。そのことを先取りして、こんなところで仰っています。

それから、まぁ主人がいつ来るかわからないから、ドンチャン騒ぎをやっている。突然、主人がやってくる。そういう時に、ドンチャンしている僕というのは非常にこっぴどく叱られるよ、ということが次に書かれています。

41ペテロ言う『主よ、このを言い給うは我らにか、また凡ての人にか』42主いい給う『主人が時に及びて僕どもにの糧を与えさする為に、その僕どもの上に立つるにしてき支配人は誰なるか、43主人のきたる時、かく為し居るを見らるる僕は幸福なるかな。44われをもて汝らに告ぐ、主人すべてのを彼にどらすべし。45若しその僕、心のうちに、主人の来るは遅しと思い、僕・をたたき、飲み食いして酔い始めなば、46その僕の主人、おもわぬ日知らぬ時に来りて、之を烈しくうち、そのを不忠者と同じうせん。47主人の意を知りながら用意せず、又その意に従わぬ僕は、笞うたるること多からん。

それからちょっと困ったことがある。48節の後半です。こんなのはひどいじゃないのと。

48されど知らずして打たるべき事をなす者は、笞うたるること少からん。多く与えらるる者は、多く求められん。多く人にくれば、更に多くその人よりい求むべし。」（ルカ12･35～48）

「多く与えられる者は、多く求められる。多く人に預けているから、更に多くその人より請い求められる」

と。神さまは人をみて、いろんなをくださる。「こいつはものになる」と思ったら、たくさんのタラントをくださる。ところが、そのタラントを活かさないで放っておいたら、こっぴどくやられる。使いものにならないやつには、始めから神さまは与えられない。

プロ野球でもそうです。ドラフト会議で「こいつはものになる」と思ったら、それを多くの契約金で召しかかえて鍛え上げて、一軍選手として働かそうとしているわけでしょ。スポーツの世界でもそうですよ。多く与えられる者は多く求められる。始めからものにならないやつには与えられない。そういう世界のようです。

この福音の世界でも、

「これは私の弟子としてものになる」

と思ったら、いろんなものを与えられる。その代わり、多く求められる。

それはたとえば、ヨハネ伝３章を見てごらん。31節から。私は、とんでもない所と結びつけるから、おもしろいでしょ。

「31上よりるものは凡ての物の上にあり、地より出づるものは地の者にして、その語ることも地の事なり。天より来るものは凡ての物の上にあり。32彼その見しところ聞きしところをたもうに、誰もその証を受けず。33その証を受くる者は、印して神をなりとす。

「上からやって来たもの」、これはイエスご自分のことを仰っています。それから、聖霊をいただいた者、つまり、新しく生まれた者です。

「肉から生まれた者は肉である。霊から生まれる者は霊だ」（ヨハネ3･6）

とありましたね。霊による新しい誕生をした、聖霊の器。そのことがここに出てくる。イエスは天より来たる方。地上にあった我々は聖霊によって新しく生まれ変わらされた者です。その姿がここにあります。

それが今度は、「神の遣わし給いし者」になっているわけです。今度は地上では、我々はキリストの十二弟子みたいにこの世に遣わされているんです。「遣わされる」ということは、それだけの力をいただかなれば遣わされない。言葉をいただかなればなりません。何よりも霊をいただかなればなりません。ここに、

34神のし給いし者は神の言をかたる、神、御霊を賜いて量りなければなり。

とあるでしょ。これはイエスご自身のことだけれども、我々もイエスの弟子としてこの世に遣わされる以上は、この覚悟を受けとっていかなければいけませんよ、皆さん。

「神の遣し給いし者は神の言をかたる、神、御霊を賜いて量りなければなり」

「はい、イエスさま。私はあなたから遣わされました。だから、ここに書いてある通りの御霊、御言をください。そして、私が語る言葉はいわゆる人間の言葉ではなくて、霊の言葉を語らしめてください」

そうやって、世に遣わされた者として社会に出ていく。これがなんです。皆さん、証人というのはそういう自覚を持っていただきたいんです。

35父は御子を愛し、万物をその手に委ね給えり。36御子を信ずる者はのをもち、御子に従わぬ者は生命を見ず、反って神のその上に止るなり。」（ヨハネ3･31～36）

そういうことがヨハネ伝にちゃんと出てきます。ですから、ヨハネ伝であろうと、ルカ伝であろうと、霊の次元のこととなったら全部、がっているんです。地上のことにおいてはバラバラかもしれません。でも、霊の次元、そこのことが語られているときは、イエスの言葉も弟子たちの言葉もすべてちゃんと繋がっていますから。それを霊の次元でつかまえていく。そういうふうに読まなければなりません。

# ●私たち自身が新しく生まれなければならない

そのためには私たち自身が新しく生まれなければならない。「いえ、生まれることができるんでしょうか？」と。皆さん、どうでしょう？　できなかったらウソですよ、十字架で片づけられたから。それをしっかり受けとることです。

「われ主と共に十字架せられたり。もはやわれ生くるにあらず」（ガラテヤ2･20）

と。ガラテヤ書２章20節。肉なる我は今もなお昔のまま居るかもしれない。けれども、肉なる自分の奥にちゃんと霊なる御霊の新しい我が宿っている。

「それが本当のあなただよ、本当の私だよ」

と。そういう受けとり方をしていかなければならない。それが小池先生が言われた、

「人間小池を見るな。御霊の小池を見てくれ」

と言われた、その本当の仰りたかったことはそれだろうと思う。

「人間小池は死にいたるまで罪びとだ。けれども、その奥にある御霊の小池を見てほしい」

と、そういうことを言われた。それは皆さんお一人お一人がそうなんですね。

「われ主と共に十字架せられたり。もはやわれ生くるにあらず。復活のキリスト、聖霊のキリストわがうちに在りて生き給うなり。われ今肉体にありて生くるは、わがために己が生命を捨て給いし御子イエス・キリストを信ずるによりて生くるなり」（ガラテヤ2･20～21）

ガラテヤ書２章20～21節、これは絶対に覚えておいてください。それと、コロサイ書３章１～３節。おそらくそんなことを言う人は今までいなかったと思いますね、私はこの福音集会にずっと集っていて。小池先生もあまりそういうふうには仰らなかったけれども、何か私はそう思わされます。

ローマ、コリント、ガラテヤ、エペソ。ピリピ、コロサイ、テサロニケという。コロサイ書３章１節、

「１汝等もしキリストと共に甦えらせられしならば、上にあるものを求めよ、キリストに在りて神の右に坐し給うなり。２汝ら上にあるものをい、地に在るものを念うな、３汝らは死にたる者にして、其の生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。４我らの生命なるキリストの現れ給うとき、汝らも之とともに栄光のうちに現れん。」（コロサイ3･1～4）

ここも私は少し意訳をします。

「あなた方はもう既にキリストと一緒に甦ったのだろ。だったら、上なるものを求めるよね。キリストさまは天界におられて神の右に坐していたもう。

これはローマ書にも出てきます。

既にキリストと一緒に甦った、そういう霊的存在であるあなた方は、上にあるもの、天にあるもの、天の次元にあるものを求めるのは当然のことであって、地にあるものを思うことはありえないよね。何となれば、あなた方はもう地上では死んだもの、あなたの本当の生命はキリストと一緒に神さまの中に隠されている。天の次元に隠されてある。そして、あなたの本当の生命である御霊のキリスト、霊界のキリスト、天にあるキリストさまが現れてくださる時、あなたも同じ栄光の姿で現れてくるんだよ」

と。そういうことを、皆さん、お読みになって、ブルブルブルッと、サカナ君ではないけれども、「うれしい！　万歳！」と叫ばなければ、読んでないですよ。

聖書の言葉はみんなあなた方のために書かれている。私のために書かれている、

「あなたの本質はこれだよ」

と。世の中の人はあなたの外側しか見てくれない。

「ああ、年取ったな、やっぱり奥田君も年取ったな、背中も曲がったしな」

と、それしか見てくれない。でも、御霊の主さまはわがうちに宿って、

「あれは背中は曲がっているかもしらんけれども、御霊の奥田は輝いているんだ」

と。

「見えるものではなくて、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的にして、見えないものは永遠に続くんだよ」

と、ちゃんとコリント後書４章に書いてある。そういうふうに物事を見ていく。

コリント後書４章は、パウロは自分のことを語っている。

「７我等この宝を土の器にてり、これ優れて大なるの我等より出でずして、神より出づることの顕れんためなり。８われら四方よりを受くれどもせず、ん方つくれどもを失わず、９責めらるれども棄てられず、倒さるれども亡びず、10常にイエスの死を我らの身に負う。これイエスのの我らの身にあらわれん為なり。」（コリント後4･7～10）

われ土の器に宝を持てりと。「宝のある所に心もある」とありましたが、その宝は土の器の中に私は持っている。これは御霊のことですね。「このお方がいらっしゃるから、責められてもびくともしない。倒されても滅びず、イエスの死を常に身に負いながら、その生命はあなた方の中に顕れていくんだから」と、盛んなることを言いまして、16節から、

「16この故に我らはせず、我らが外なる人はるれども、内なる人は日々になり。17それ我らが受くるくの軽きは、極めて大なる永遠の重き光栄を得しむるなり。18我らの顧みる所は見ゆるものにあらで見えぬものなればなり。見ゆるものはにして、見えぬものは永遠に至るなり。」（コリント後4･16～18）

この故に我らは気落ちしない。外なる人――この肉体ですね――肉体をまとった人間というのは歳と共に滅びていく。破れていき壊れていく。でも、内なる人、霊なる人、天の次元で新しく生まれた人は日々に新たなり、日々に成長していく。私たちがこの世で受けるしばらくの軽い患難は、極めて大いなる永遠の重き光栄――「しばらくの軽い患難」、それに対して「永遠の重き光栄」、全部これはコントラストです――を得させると。

だから、皆さん、この地上でいろんな悩みをお持ちです。自分の身体もなかなか自由にならなくなる。また、家族の者もだんだん難しい歳頃になってくる。その他社会の何でもすべて以前よりは住み心地がわるくなってくる。これがこの世の中です。けれども、それはしばらくの軽き患難であって、我々は永遠の重き光栄をいただいている。私たちの目を注ぐ、目のつけどころは見えるものではない。現象面ではない。見えないもの、永遠なるものを見ていく。見えるものは一時的であって、見えないものは永遠にいたるなりという。

# ●魂は霊体という体を与えられる

そして、コリント後書５章に行きますと、私たちがこの地上を去った時にどういう姿になるか、ということが書かれている。

「１我らは知る、我らのなる地上の家、るれば、神の賜う、すなわち天にある、手にて造らぬ、永遠の家あることを。２我等はその幕屋にありて歎き、天より賜うをこの上にんことを切に望む。３之を著るときは裸にてある事なからん。４我等この幕屋にありて重荷を負える如くに歎く、之を脱がんとにあらで、此の上に著んことを欲すればなり。これ死ぬべき者の生命に呑まれん為なり。５我らを此の事にうものとなし、その証として御霊を賜いし者は神なり。６この故に我らは常に心強し、かつ身に居るうちは主より離れ居るを知る、７見ゆる所によらず、信仰によりて歩めばなり。８斯く心強し、願うところはろ身を離れて主と偕に居らんことなり。９然れば身に居るも身を離るるも、ただ御心にわんことをむ。10我等はみな必ずキリストのの座の前にあらわれ、善にもあれ悪にもあれ、各人その身になしたる事にいてを受くべければなり。」（コリント後5･1～10）

「私たちの幕屋である地上の家が

これは我々の身体のことを言っている、

壊れれば、天上にある手にて造らない永遠の家がある。そういうことを私たちは知っている。我々はその幕屋にありて

地上の幕屋です、

肉体を宿としているときは嘆いている。天上の霊の、霊のをひたすら憧れている。そしてそれを上に着ようと思っている。これを着れば、霊魂は裸ではない。霊体を与えられる。魂は裸でいない。必ず霊体という体を与えられる。我らはこの地上においては、重荷を負っている者

すべて労する者、重荷を負う者です、

そのようにして嘆き苦しんでいる。しかし、それを脱ごうとはしない。

肉体を脱ぐということは、別な言い方をしたら、自ら命を断つということです。それは願わない。

霊の、永遠の生命を上にいただこうとして呻いている。これ死ぬべき肉体があのキリストの永遠の生命にのみこまれてしまうためである。我々をそれに相応しい者にしてくださったのは御霊である。また、御霊を下さった神さまである。だから、私たちはいつも心強い。地上にあってはイエスを見ていない。見ていないイエスを見るかのごとくに歩んでいくのが信仰という。

「見ゆる所によらず、信仰によりて歩めばなり」というのはそういうことです。

イエスは見えない。しかしながら、見えないイエスを見えるがごとくに見て歩んでいく。斯く心強し、願うところはろ身を離れて主と偕に居ることを願っている。だとすれば、地上で肉体を宿としているときも身を離れて霊の次元にいくときも、御心にかなうことだけが願いである」

と。

# ●闇と光の霊の次元

「霊の次元」と言いましても、いろいろあります。霊の次元は、闇も霊の次元に入りますよ。霊の次元で、闇と光があるわけです。ヨハネ伝３章16節から、有名なところです。

「16それ神はそのを賜うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信ずる者の亡びずして、永遠の生命を得んためなり。17神その子を世に遣したまえるは、世を審かん為にあらず、彼によりて世の救われん為なり。18彼を信ずる者は審かれず、信ぜぬ者は既に審かれたり。神の独子の名を信ぜざりしが故なり。19その審判は是なり。光、

「光」とはイエス・キリストのことです、

世にきたりしに、人そのの悪しきによりて、

行いが悪い人は光がこわいんです、悪事が暴かれるから。そういう人は暗闇を好むんです、見えないから。だから、悪い行いの人は、

光よりも暗黒を愛したり。20すべて悪を行う者は光をにくみて光に来らず、その行為の責められざらん為なり。21真をおこなう者は光にきたる、その行為の神によりて行いたることの顕れん為なり。」（ヨハネ3･16～21）

と。こういうことが言われています。

さっきのコリント後書の５章に行きますと、

「10我等はみな必ずキリストの審判の座の前にあらわれ、善にもあれ悪にもあれ、各人その身になしたる事にいてを受くべければなり。」（コリント後5･10）

というのは、自分のやっている姿、自分が光を望んでいるのか、闇を好んでいくのか、自分で行き先を決めているというわけでしょ、ヨハネ伝は。この５章でもそういうことがありますね。

「我らはみな必ずキリストの審判の座の前にあらわれ、善にもあれ悪にもあれ、みんな自分のやったことに随いて審判を受けるんだ」

と。さっきルカ伝の中で、

「身を殺したのち魂を何もできないものを恐れるな。身を殺したのち地獄に陥れる権威あるものを恐れよ」（ルカ12･4）

とありました。神さまのことです。この、

「各人その身になしたる事に随いて報を受くべければなり」

というのがそのことではないですか。人間は地上だけではない。霊界に入った時に、その人が本当に地上で善をなしてきた親切な人は神さまから祝福を受ける。けれども、地上でさんざん悪事を働いたり、人をいじめたり、悪い事ばっかりやってきた、そういう人たちは人をすことはできても、神さまの目をごまかすことはできない。必ず審きを受けると、ハッキリここで語られているわけです。

こういうことをやはり、世の中の人は知っておくべきですね。ご家庭でも子どもたちにハッキリそういうことを示すべきです。昔はよく、

「人はごまかしても、天をごまかすことはできないよ」

ということをお父さんお母さんは子どもたちに教えたようなんです。南原繁という昔、東大の総長をなさった方は非常に貧乏だった。お母さんが南原繁を背負いながら、道を歩いて、何かお金を借りに行かれた時にだったか、

「人は見てなくても、天は見ているよ」

ということをちゃんと子どもさんに、南原繁に教えこまれたそうです。それがずっとしみ込んでいたということを南原さんは告白している。やはり小さい時から、

「人はごまかしても、神さまはごまかせないよ」

ということをきちんと子どもさん方に伝えるということ。それから、

「この世でいじめている子はあとで大変な不幸な目にあうんだからね。いじめられる方もだけれども、いじめる方がもっと可哀相だ。そのくらいの気持になりなさいよね」

と言って、親御さんが子どもさんを一緒に背負ってあげる。また、必要があれば、いじめる子どものところに出かけて行って、

「あなた、どうしてそんなことをやるの。何かあなた、自分で苦しいことがあるんじゃないの。うっぷんを晴らしたいことがあるんじゃないの。それをうちの子どもにぶつけているんじゃないの」

と、責めるのではなくて、

「一緒に苦しみを荷なうからね、先生には言わないからね」

と、そういう形で出かけて行ったらどうなんだろうかなと思う。これは私の想像ですよ、自分でやってないから。何かそういうことができる心のゆとり、これはやはりキリストを知っている方は心のゆとりが持てます。どんなことにでっくわしても、そこにゆとりがあります。けれども、キリストを知らない方は、もうオタオタするだけではないかと思う。

# ●なんじら心を騒がすな、神を信じまた我を信ぜよ

キリストが我々に語っておられる言葉で、好きなのは、

「なんじら、心を騒がすな。神を信じ、我を信ぜよ」

ヨハネ伝14章です。何かあったら心が騒ぐでしょ。「あっ、地震だ。どないしよう。机の下に入れ！」なんて。でも、キリストは、

「なんじら、心を騒がすな。神を信じ、我を信ぜよ」

と。ヨハネ伝14章をちょっと開いてください。

「１『なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。２わが父の家にはおおし、然らずば我かねて汝らに告げしならん。われ汝等のために処を備えに往く。３もし往きて汝らの為に処を備えば、復きたりて汝らを我がもとに迎えん、わが居るところに汝らも居らん為なり。

ここからはキリストの遺言ですよ、お別れにあたって、

「もうこれで、あなた方とはお別れだ。だから、最後にこういうことだけはお伝えしたい」

といって、お話になった。それが編集されて、こういう形になって残った。その時に、

「なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。私はあなた方のために天国に場所を用意しに行く。用意ができたら、天国の準備ができたら、また帰ってくるよ。私が居るところにあなた方も居るためだ」

イエスはいつも、「あなた方と一緒におりたい」と、こう言ってくださった。そして、

10我の父に居り、父の我に居給うことを信ぜぬか。わが汝等にいう言は、己によりて語るにあらず、父われにしてをおこない給うなり。11わが言うことを信ぜよ、我は父におり、父は我に居給うなり。

「我は父に居り、父は我に居たもう」

ということを仰って、そして、あなた方とも一緒に居りたいということをずっと以下に仰るんですが、19節に、

19くせば世はわれを見ず、されど汝らは我を見る、われ活くれば汝らも活くべければなり。

しばらくしたら、世の人は私を見なくなる。十字架でお亡くなりになりますから、肉体の屍体は見ることはできても、イエスご自身の活けるイエス・キリストはもう見ることはできない。けれども、あなた方はちがう。私は生きる。お前たちも生きるんだと。これはご復活のご自分を指しておられる。そして、聖霊となって、あなた方の所に帰ってきて、父なる神と御子なるキリスト、聖霊のイエスさま、そして我々と、四者一体となるということを予言しておられる。

20その日には、我わが父に居り、なんじら我に居り、われ汝らに居ることを汝ら知らん。21わがを保ちて之を守るものは、即ち我を愛する者なり。我を愛する者は我が父に愛せられん、我も之を愛し、之に己を顕すべし』

と言って、

23イエス答えて言い給う『人もし我を愛せば、わがを守らん、わが父これを愛し、かつ我等そのに来りてを之とともにせん。

人がもし私を愛するならば、私の言葉を守るだろう。私の父はその方を愛し、我等――父なる神と私（キリスト）――はそこで住処を一緒にする。だから、

「父なる神さま・御子なるキリスト・聖霊のキリストそして我々と、四者が一体となる」

ということをここで約束しておられる。それから更に、

「助け主、聖霊をあなた方につかわす」

ということも約束されている。この聖霊は平安を与え給う霊である。

26すなわちわが名によりて父のしたもう聖霊は、汝らにの事をおしえ、又すべて我が汝らに言いしことを思いさしむべし。27われ平安を汝らにす、わが平安を汝らに与う。わが与うるは世の与う如くならず、なんじら心を騒がすな、またるな。」（ヨハネ14･1～27）

「わが平安を汝らに与える」

という。私は、クリスチャンの共通にあるものは、平安だと思う。霊の賜物はさまざまです。超能力をいただく方もあるかもしれません。預言や異言を賜る方もあるかもしれません。けれども、共通していえることは、平安と愛ですね。その人の中には愛が、平安がある。その人の中には愛が宿っている。キリストの愛が。これが共通点ではないかと思う。

そして、「愛が最高である」というのがコリント前書13章です。

「１たとい我もろもろの国人の言および御使の言を語るとも、愛なくば鳴る鐘や響くの如し。……４愛は寛容にして慈悲あり。愛は妬まず、愛は誇らず、らず、……13げに信仰と希望と愛と此の三つの者は限りなくらん、而して其のうち最も大なるは愛なり。」（コリント前13･1～13）

とありますね。

# ●聖書の中の御言群を探す宝物発見の旅

こういうところは本当にみな繋がっています。そういうものを、どうぞ皆さんも、繋ぎにつなげて受けとってほしいんです、群という形でね。御言群がいくつかある。今なにか「古墳群」とかいって奈良などでやってますわ、「ここは古墳がいっぱいある」とか。そんな古墳なんて探したってしょうがない。聖書の中の御言群を探して、これは永遠の生命の、古墳ならぬ活ける生命の御霊が宿っている宝物である。そういう宝物発見の旅を、皆さん、続けていく。そういうふうな気持で、

「もう聖書とは離れられません」

というふうに成っていただいたら、天国で小池先生はニコニコして喜んでいますよ。

「そうだ、奥田君、いいことを言うじゃないか。私の気持とそっくりだな」

とか言って。いや、ヨハネ伝の14章から16章は本当にありがたいところですよ。なんとキリストは我らのことをかくまでも思っていてくださるのかと、そう思いますよ。

そして、17章へ来たら、最後の祈りが出てきて、

「１イエスこれらの事を語りはて、目を挙げ天を仰ぎて言い給う『父よ、時来れり、子が汝の栄光を顕さんために、汝の子の栄光を顕したまえ。

「父よ、時きたれり、今こそ子としての栄光を顕してください」

と。それまでは、一度も自分のことを祈られなかった。この時だけは、

「どうぞ、今こそ、あなたからかつて天においていただいていた私の栄光を今、地上においても、どうぞ、顕してください」

と、初めて、まぁある種のわがままの祈りをここでなさった。「汝の子の栄光を今あらわしてください」と。

２汝より賜わりし凡ての者に、永遠の生命を与えしめんとて、万民を治むる権威を子に賜いたればなり。３永遠の生命は、唯一のの神にいます汝と、なんじの遣し給いしイエス・キリストとを知るにあり。

「永遠の生命とは、唯一の真の神でいますあなたと、あなたがお遣しくださったこのイエス・キリスト、この方と一つになることが永遠の生命です」

と言われた。永遠の生命とは観念的なものではない。

「唯一の真の神でいらっしゃるあなたと、あなたがお遣しになったキリスト――今でいうなら、聖霊のイエスさまと――本当に一つとなるということ、これが実は永遠の生命なんです」

と言われました。それから今度は、

12我かれらと偕におる間、われに賜いたる汝の御名の中に彼らを守り、かつ保護したり。

「あなたが私を世に遣わしてくださったように、今度は私は弟子たちを世に遣わします。私が地上にいたときにはあなたの御名の中に彼らを守ってきました。けれども、今はもう地上からいなくなります。だから、どうぞ、あなたが彼らを守ってやってください」

という、それが以下の祈りになってきます。18節に、

18汝われを世にし給いし如く、我も彼らを世に遣せり。19また彼等のために我は己を潔めわかつ、これ真理にて彼らも潔め別たれん為なり。20我かれらの為のみならず、その言によりて我を信ずる者のためにも願う。21これ皆一つとならん為なり。」（ヨハネ17･1～21）

「あなたが私を世に遣してくださったように、今度は私も彼らを世に遣しました。それからまた、彼らを通して御言を聞く者たち――これが私たち異邦人です――がみな一つとなるためです」

と。弟子たちを通して、ユダヤの民は改めて神の言を聞いたんです。異邦人はパウロを通して聞いた。その異邦人伝道のパウロの流れをくんで、ルターの宗教改革があり、そして私たちが今、この福音を、内村・小池というあの福音をいただいているということになります。そういう者たちのために祈ってくださっているのが、この17章の祈りです。

# ●十字架の受難の告知と山上の変貌

今日はルカ伝12章というのが主題でしたけれども、お話をしていればきりがありません。「我は火を投ぜんために来たれり」と、これが一番ピークのところですね。49節、

「49我は火を地に投ぜんとてれり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。50されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは、思いることばかりぞや。」（ルカ12･49～50）

と。「受くべきバプテスマとは」十字架のバプテスマ、血のバプテスマです。

イエスという方は、祈っておられたら眩く輝いてそのまま天に往ってしまう方なんですよ。これを絶対忘れないでくださいね。そのことがあの山上の変貌のところで顕れているわけです。

あの山上の変貌は、ルカ伝でいいますと、９章に出てきます。マタイ伝でもイエスは弟子たちに対して、「私のことを人々は何といっているかね」と、お尋ねになっています。ここでも「人々は何と言ってますかね」と聞いた。

「18イエス人々を離れて祈り居給うとき、弟子たち偕におりしに、問いて言いたもう『群衆は我を誰というか』19答えて言う『バプテスマのヨハネ、はエリヤ、或人はの預言者の一人よみがえりたりと言う』20イエス言い給う『なんじらは我を誰と言うか』ペテロ答えて言う『神のキリストなり』」

と。「キリスト」というのは、神さまから「油注がれた者」また「メシヤ」という言葉です。そう告白したら、イエスが、

「メシヤは必ず十字架にかけられて殺される」

ということを仰る。そんなメシヤというのは、弟子たちには絶対に受け入れがたいものなんです。イエスが復活されてからも、まだまだ彼らは目覚めていない。復活されたキリストについては告白します、

「イエスは甦えられた。十字架につけたイエスを神さまは甦えらせて、復活させた。だから、これで救い主ということが証明された」

と、復活のキリストを言いますけれども、

「十字架は、我々が聖霊という永遠の生命をいただくためにいかに大事であるか、我々自身の贖いのために十字架がどれだけ必要であるか」

ということが、弟子たちはわかっていないんですよ。それでイエスはここで、

22『人の子は必ず多くのをうけ、長老・祭司長・学者らに棄てられ、かつ殺され、三日めに甦えるべし』

この「甦えるべし」の「べし」は「必然である」ということ。それから一同のものに、

「私に従ってくるということは大変なことだ。いいことずくめではない。むしろ、苦しいことが多いよ」

と。

23また一同の者に言いたもう『人もし我に従い来らんと思わば、己をすて、日々おのが十字架を負いて我に従え。

これが「自分」という十字架、自分自身が十字架だということ。それからこの世では十字架を負うという、キリストのあの十字架を一緒に負うという、二重の意味があると思う。

24己が生命を救わんと思う者は之を失い、我がために己が生命を失うその人は之を救わん。25人、全世界をくとも、己をうしない己を損せば、何の益あらんや。26我と我が言とを恥ずる者をば、人の子もまた、己と父と聖なる御使たちとの栄光をもて来らん時に恥ずべし。

「たとえ全世界をもうけても、本当の生命、永遠の生命を失うならば、なにもプラスにならない。また、地上で私を恥じとして拒む者は、それを私もやがて天において、『知らない』と言うよ」

と言われる。そのあとで、一週間後に山に登られた。そして変貌されるんです。だから、十字架のことを予言されたその六日後あるいは八日後に、十字架の受難を告知されたのちに、永遠の輝きを見せておられる。この二つは結びついているということです。

ここは素晴らしいでしょ。ルカ伝では「八日のち」と書いてありますね。

28これらの言をいい給いしのち八日ばかり過ぎて、ペテロ、ヨハネ、ヤコブをきつれ、祈らんとて山に登り給う。」（ルカ9･18～28）

ペテロ、ヨハネ、ヤコブのこの三人しか連れて行かない。神の国の奥義というのは、そう簡単に群衆には示されない。

イエスは、癒しをなさる時でも、ペテロ、ヨハネ、ヤコブといった直弟子たちと両親だけで、他の者たちは拒絶しておられるでしょ。変なざわつく霊が邪魔をする。本当に神一すじという集中できる者だけを連れて、そして

「タリタ、クミ！」（少女よ、起きよ！）

ですよね。そうしたら甦ってきた。イエスは何も魔術師ではないですから、神の霊によって御業をなさっています。神の霊が働く場をそこにつくりださないと、神さまの霊は働かない。ルカ伝では、

「キリストはナザレではあまり御業ができなかった」

と書いてある。

「あれはヨセフの子どもではないか。大工のではないか」

と、みな肉の思いでイエスを見ている。そしたら、イエスの御業は働かない。でも、そういうことを知らない所では、イエスの霊の働きはあざやかに起こるわけです。そういうこともちゃんとえておいていただきたいと思います。

ここでは山上の変貌です。

「28……ペテロ、ヨハネ、ヤコブをきつれ、祈らんとて山に登り給う。29かくて祈り給うほどに、御顏のかわり、其の衣白くなりて輝けり。30視よ、二人の人ありてイエスと共に語る。これはモーセとエリヤとにて、31栄光のうちに現れ、イエスのエルサレムにて遂げんとする逝去のことを言いいたるなり。」

文語訳では「逝去」と書いてある。口語訳では、

「栄光の中に現れて、イエスがエルサレムで遂げようとする最後のことについて話していたのである。」（口語訳）

「逝去」を「最後のこと」と書いてある。この原文は「エクソードス」「脱出」というそうです。この地上を抜け出していかれること。

その前にちゃんと十字架のことを言っておられるでしょ。弟子たちに自分は、

「人の子は必ず多くの苦難をうけ、長老・祭司長・学者らに棄てられ、かつ殺され、三日めに甦えるべし」

といういうことをハッキリ仰って、それからのちに――だから、受難があって、そのあとに八日後に、眩い姿に変わられる。この世を脱出していかれる。「出エジプト」ならぬ「出現世」。それを「如何なるさまで」ということをエリヤとモーセにご相談なさっている。そこに居合わせたペテロはもううわごとを言っている。あまりにも凄いものを見せられたから。そういう場面です。

32ペテロ及び共におる者いたくざしたれど、目を覚ましてイエスの栄光および偕に立つ二人を見たり。33二人の者イエスと別れんとする時、ペテロ、イエスに言う『君よ、我らの此処に居るは善し、我ら三つのを造り、一つを汝のため、一つをモーセのため、一つをエリヤの為にせん』彼は言う所を知らざりき。

自分で何を言っているのかわからない。

34この事を言い居るほどに、雲おこりて彼らを覆う。雲の中に入りしとき、弟子たち懼れたり。35雲より声出でて言う『これは我が選びたる子なり、汝ら之に聴け』36声出でしとき、唯イエスひとり見え給う。弟子たち黙して、見し事を何一つ其の頃たれにも告げざりき。」（ルカ9･28～36）

こういうことが書いてある。こういう場面は本当にリアリティです。イエスというのはこういうお方なんです。

# ●イエスの心を心とする

そしてその通りに栄光の姿で顕れて来られたのがあの復活という現象です。使徒行伝やルカ伝24章でイエスの復活の場面が出てきますが、あれはなにも死人が息を吹き返したという、そんなレベルではない。イエスの栄光の姿が顕れてきた。本来の姿が忽然として顕れてきた。それを「復活」と人は呼んでいるだけです。ルカ伝24章では、弟子たちはわからなくてとまどっている。エマオへ旅立っていく。そこへ旅人の姿で顕れてくる。そういうことが出てきます。そういうように、イエスという方はもう、地上におられるときから霊の次元をちゃんと持っておられますから、その次元から語っておられると、人々は理解できない。みんなこの世的な肉の次元でしか理解しようとしない。もうギャップがある。

だから、さっきのルカ伝12章で、

「われには受くべきバプテスマあり。思い迫ることいかばかりぞや」（ルカ12･50）

と仰っていることは、そういうキリストの苦しみが出ていると思います。イエスだけが天の次元をひっさげて地上に来られた。けれども、この地上の者たちは、宗教家たちも含めて、誰ひとりイエスを受けとり理解しようとしない。自分たちの肉の次元でしか判断しない。まさに「水と油」とはこのことなんです。さっきの、

「此等のことをきものき者に隠して、に顕したまえり」（ルカ10･21）

という祈りも、そういうギャップの嘆き。それに対する神さまの側から慰め。それに対する感謝の祈り。そんなふうに私には読みとれるんです。

こういうイエスが地上におられたときの苦しみ、それはほとんどの人は理解していないと思います。サンダーシングが書いていたと思います。

「イエスが地上におられたとき、地上で生きるということ自体がもうイエスにとってどれだけ苦しかっただろうか」

と彼は書いている。というのは、罪の世だから。

ちょうど、例えて言いますなら、私はかつて新幹線に乗ったとき、３号車というのは喫煙車で車内はもう煙でモウモウなんです。ところが、私は時間に遅れて６号車あたりにとび乗って、それから１号車の指定席へ行くのに、「我には受くべきバプテスマあり」と（笑）、タバコの煙のバプテスマ。もう口と鼻をふさいで必死になってそこを通る。ところが、その中にいる人は全然気づかない。つまり、世の中の人は罪の世にありながら、罪の世に気づかない。ニコチンに気づかない。けれども、贖われた御霊の子はそこを通り抜けるのに必死になってくぐりぬける。それを実感しましたよ。皆さんもぜひ、あの３号車の喫煙車を通りぬけてみてください。

だから、サンダーシングが言ってますように、

「イエスがこの地上で生きているということ自体がどんなにイエスにとって苦しかっただろうか」

と。ちょうど私が３号車を通り抜けるような苦しみを、イエスは地上にあるだけで味わわれたにちがいないということをサンダーシングが言ってました。

我々はどんなに理解しようなんて思ったって、本当にイエスの地上での御苦しみ、嘆き、祈り、それはとてもじゃない、理解できないと思うんです。けれども、

「どうぞ、あなたの御意をこころとさせてください」

と願う。

「イエスの心を心とせよ」

とピリピ書に出てきます。それが私たちの願いです。ピリピ書２章を見て下さい。５節、

「５汝らキリスト・イエスの心を心とせよ。６即ち彼は神のにて居給いしが、神と等しくある事を固く保たんとは思わず、７反って己を空しうし、僕の貌をとりて人の如くなれり。８既に人のにて現れ、己を卑うして死に至るまで、十字架の死に至るまでい給えり。９この故に神は彼を高く上げて、之にの名にまさる名を賜いたり。10これ天に在るもの、地に在るもの、地の下にあるもの、とくイエスの名によりて膝を屈め、11且もろもろの舌の『イエス・キリストは主なり』と言いあらわして、栄光を父なる神に帰せん為なり。」（ピリピ2･5～11）

その通りですね。そしてこういうあなた方だからと。２章の始めからもう一度見ますと、

「１この故に若しキリストによるめ、愛による、御霊の、またととあらば、２なんじらを同じうし、愛を同じうし、心を合わせ、思うことを一つにして、我がをしめよ。３何事にまれ、徒党また虚栄のためにすな、おのおの謙遜をもて互いに人を己に勝れりとせよ。４おのおの己が事のみを顧みず、人の事をも顧みよ。」（ピリピ2･2･1～4）

そして、

「あなた方はキリスト・イエスの心を心とせよ」

と、これなんです。「キリスト・イエスの心を心とする」とはどういうことかというと、イエスという方はもともと神の子でいらっしゃった。霊の次元の神の次元にいらっしゃったのが、肉の次元におりてきて、人間の姿をとって、そしてさんざん苦しんでくださった。十字架の死にいたるまで苦しんでくださった。こんな方を神さまは放っておくはずがない。この方の本質は永遠の生命だった。その本質が顕れたまでで、これが復活という事態だ。そうなるともう、我々は「イエスさま、イエスさま」と、栄光をキリストに帰していくことしかないじゃないですかと。

「12されば我が愛する者よ、なんじら常にいしごとく、我が居る時のみならず、我が居らぬ今もますます服い、れきて己が救を全うせよ。

そして今度は、「あなた方は」といって、地上の兄弟たちに対して、

「私は今は一緒にいない、離れている。けれども、いたときにあなた方が従順であったように、ますます従い、畏れ戦いてご自分の救いを完全なものにしなさい。」

と。ただ十字架を言葉で受けとっているだけではなくて、あなた方自身が、

「われ主と共に十字架せられたり。もはやわれ生くるにあらず。復活のキリスト、聖霊のキリストがわがうちに在りて生き給うなり」

という、あのパウロのガラテヤ書２章20節の現実をしっかり受けとってほしい、というのがこのパウロの気持ですね。だから、

13神は御意を成さんために汝らのにはたらき、汝等をしてをたて、を行わしめ給えばなり。14なんじらかず疑わずして、凡ての事をおこなえ。15是なんじら責むべき所なく素直にして、此の曲れるなる時代に在りて神のなき子とならん為なり。汝らはのを保ちて、世の光のごとく此の時代に輝く。

「神はあなた方の中に働いて、志をたて、業を行わせていらっしゃる。だから、どんなことでも呟かないで、疑わないで、行いなさい。そうやって、あなた方はなき御霊の子となって、やがて神の国がきたときに輝くんだから。あなた方は既にこの悪しき世の中で輝いているんだから」

とパウロは言ってます。そして、

18かく汝等もよろこべ、我とともに喜べ。

「私と一緒に喜んでほしい」と、ずっと言いまして、それから、ひとつの嘆きがここに書かれています。21節、

21人は皆イエス・キリストの事を求めず、唯おのれの事のみを求む」（ピリピ2･12～21）

これはこの世の人のことを言われてますけれども、クリスチャンだってこういうことが多いんですよ。本当にキリストのために思わない。自分の幸せのためにキリストをに使っている。

「イエスさま、こうしてください、あれしてください。ここの病気を治してください」

と、全部、「自分、自分、自分」なんです。それはキリストは優しいから、

「何でも願い求めよ。そうしたら、かなえてあげるよ」

と言ってくださいました。けれども、イエスの御意は、

「まず神の国と神の義を。まず天のことを、まず御国を求めよ」

と、それがイエスの本当のお心なんです。御国を求める。キリストの心を心とする。

「そうすれば、あなたに必要なことは全部、私がちゃんと顧みてあげるから」

と。ところが、クリスチャンがまず、

「クリスチャンとしてお願いします。これを聞いてください、あれを聞いてください。あれやってください。はい、聞いていただいてありがとうございます」

なんて、「そんな祈りはいやだよ」と、私だったらそう思いますね、向こうでキリストだったら。

「まず神の国と神の義を。まず天の父の御国を求めよ」（マタイ6･33）

と仰った。そこから始まるのがクリスチャンではないですか。

「あなた方は既に死にたる者にして、あなたの生命はイエス・キリストのうちに隠されてあるんだよ」（コロサイ3･3）

と。そういうふうにハッキリ、

「十字架で私は死んでいます。われ主と共に十字架せられたり。もはやわれ生くるにあらず」（ガラテヤ2･20）

という、そこをスタート地点にして、それから天国人として御意を求めていくというのがクリスチャンの在り方なんです。ところが、おねだりするクリスチャンが多すぎるように、私は思う。祈りが叶えられると、「ハレルヤ！　ハレルヤ！」という。それはそれも否定はしませんけれども、やはり御意というのは、そんなところにあるのではない。もっともっと高い次元を求めていらっしゃると、私は思います。

# ●なぜ私は永遠の闇の中に突き落とされることが必要なのか

どうぞ、ここにいらっしゃる方々は、「キリストの心を心とする」というのは、キリストが地上におられたときに何を求めておられたか。

「われ火を投ぜんために来たれり。されど受くべきバプテスマがある。思い迫ることいかばかりぞや」（ルカ12･49～50）

と。あれがキリストの心ですね。聖霊を与えたい。けれども、聖霊を与えるには、私は血のバプテスマ、十字架を通り抜けなければならない。しかしそれを果たすためには、本当にキリストは肉体にあって苦しまれたでしょ。ゲッセマネで血の汗を流して祈られたでしょ。何も命が惜しいのではない。神さまと一つである世界から引き離されて、神無き闇に永遠に突き落とされる。それは耐えられない。

「どうして、それが必要なんですか。私はあなたとも離れたことがなかったじゃないですか。あなたの愛の中にいだかれ、あなたの愛の中に生き、あなたの心を心として、私は御意を地上に現してきたではないですか」

と。死人は甦えらされ、貧しい者は福音を聞かされ、「あのヨハネにそう言いなさい」とキリストは言われたでしょ。そういうことを、

「あなたの御意だから、私はやってきました。御意から離れて何一つやってこなかった。その私がなぜ、あなたから引き離されて、永遠の闇の中に突き落とされることが必要なんですか。それは私には耐えられません」

と。これが私の理解するゲッセマネの祈りなんです。命が惜しいのではない。父なる神さまと一つであった。それが永遠に引き裂かれて、永遠に神無きところに住まうという、それが耐えられない。

「どうぞ、そうでない方法で彼らを救うことはできないんですか」

と。ところが、

「他にないんだよ」

「わかりました。それでは、御言に、御意に従います」

と、決然と立って、ゴルゴタの丘を歩まれた。そして、十字架の上で、

「彼らを赦してください。彼らは自分で何をやっているかわからないからです」（ルカ23･34）

と。そこまでのことができる方、言葉通りの方、そんなお方を他には私は知りませんね。

「わが語りし言は霊なり生命なり」（ヨハネ6･63）

ということを本当に貫いておられます。そして、

「敵のために祈れ」（ルカ6･28）

ということをイエスは実践なさいました。ひとつも恨みがましいことを言っておられない。そういうお方を前にして、イエスを蹴飛ばす人は、私はその方の気持はわかりません。そういうお方を知らないから、

「イエスとは、私は縁がありません。私は日本国民ですから、イスラエルとは関係ありません。私は仏教徒ですから、これでいいんです」

と言って、拒んでおられるけれども、それは決してイエスを踏みにじっているというよりも知らないからなんです。自分がどんなに罪深く、神さまの前にやりきれない存在か、神の審きの前に立てない存在か、そのことを深く考えない。だから、イエスという方の十字架の凄さ、愛の深さ、イエスの歩かれた道の険しさ、そういうことをイエスの身になって自分で味わおうとなされない。

イエスの弟子ということは、「歩みを共にする」ということでしょ。さっき、「ミットライデン」「痛みを共にする」ということが「同情」だと言いましたね。そのように、キリストさまと痛みを分かち合う、苦しみを分かち合う、そういう生き方をするのがクリスチャンなんです。だから、クリスチャンはこの世で、いわゆる世的な幸せ、安楽、それを求めましたら、それは筋違いだと思います。そういうことは、求めていなくても、キリストの方から下さったら、「ありがとうございます」といって感謝したらいいんですけれども、それ自体を求めていくのは、私はよくないと思います、いわゆる幸福主義というのは。

ヒルティは『幸福論』というのを書きましたけれども、やはり、幸福を目当てにしたらいけない。神の国と神の義を求めたら、ひとりでに具わってくるものが「幸福感」なんです。「あっ、しあわせだな」と。「ああ、いい湯だなぁ～♪」というのがありますね（笑）。キリストを求めていけば、「いい湯だな」というものが伴ってくる。

「ああ、ありがとうございます。それにしくない者をこんなに祝福してくださっている。本当にありがとうございます」

という、感謝と讃美が出てくるんです。それを私はクリスチャンの在り方であろうと思っている。

そんなことで、いろんなことを語りました。

今日の主題である、「此の火既に燃えたらんには」というキリストの熱い願い、それをペンテコステで成就していきますから、私たちはそういうドラマの中に生かされている。

本当にこの新約聖書はよくできていますね。黙示録は、私は敬遠していましたけれども、黙示録も七つの教会に対して御使の言葉がある。あそこだけはよく読んでください。素晴らしいのはフィラデルフィアの教会、それから、叱られているのはラオデキヤの教会。現代はこのラデオキア教会の現代版だといわれている。「フィラデルフィア」というのは「忠実」ということです。これは非常に誉められている教会です。七つの教会はそれぞれ、

「あなたにはこういういいところがある。しかし、こういう欠点もある」

と、それぞれ長所と短所をちゃんと指摘されて、

「こうありなさいよ」

という励ましの言葉がある。そして、一番厳しい言葉をいだいているのがラオデキヤの教会で、

「あんたは生ぬるい。冷たいか熱いかどっちかであってほしい。生ぬるいのは吐き出すから」

と言われている。現在の教会の姿はまさに、憲法で保証された信教の自由のゆえに、生ぬるくなってちっとも燃えていない。

だから、燃える御霊、

「この火既に燃えたらんには」

と。「火の如き」という。小池先生は好きでしょ、火が。

「我は火を投ぜんために来たれり」

と。ところが、火が燃えていなければ、何も始まらない。それは聖霊のバプテスマということで初めて成就する。そのためにはキリストの十字架が必要だった。十字架が成就した以上は、私たちはそれを受けとって、御霊のクリスチャンとして、証人として働いていく。神の言を語らせられる。

「その者には限りなく聖霊を下さる」

と、ヨハネ伝にあります。全部つながっていますからね、霊の次元は。

「神は霊なれば、拝する者も霊とをもって拝すべきなり」（ヨハネ4･24）

とか。そうなってくると、本当に聖書は、御言が活き活きと自分の中で躍りだします。そういうことをぜひ味わってください。私の中で躍りだしたのは最近ですから。

「８６歳になったら躍りだしますから」

なんて言わないでください。小池先生は８６歳の頃はどうだったかなと、ついつい思ってしまう。９２歳までがんばりました。私はまだまだに及ばないという感じがいたしますけれども、

「師（古人）の跡をもとめず、師（古人）の求めたる所をもとめよ」

という、芭蕉の言葉ですけれども。私たちは、目標はいつもそういう高いところに置いて、そして進んで行きたいと思います。

それでは、今日はこれで終わります。

# ●祈り

それではお祈りをさせていただきます。しばらく、皆さん、黙祷なさってください。

主さま、小池先生はよく、「語るも聴くも同じこと」と仰いました。もその立場に立って、本当にそのことを思います。語るのは告白でございます。主キリストさまが私の上にどんな素晴らしいことをしてくださったか。世ののより選び分かって、時満ちてあなたのものとしてくださった、そのご計画を思います。エペソ書にも書かれていますが、「世の初めより選び分かちて」とありますように、天地創造の初めより、ここにいらっしゃる皆さま一人ひとりのことをあなたは心にとめて、あなたのプログラムの中に組み入れておられました。そして、時満ちて、最もふさわしい時にあなたご自身を現してくださったのでございます。

「誇る者は主を誇れ」

とありますように、本当に私たちは主さまに出会わせていただいて、初めて己の何たるかを知り、生きるということのどういうことであるかを知らせていただき、生きがいということは何かということもまた教えていただきました。

小池先生は、「人生は神讃美である」と仰いました。どうぞ、ここにいらっしゃるお一人お一人の日々の生活が、「聖書を生きる、キリストを生きる」、即ち日々に主を讃え、父なる神さまを讃え、聖霊となって宿ってくださるあなたを讃え、そしてあなたのご愛を、世の人のために流していく、そういう自分としておん用いてくださいという祈りの中に生きる、それが「聖書を生きる、キリストを生きる」という、御殿場福音特別セミナーで主題といたしました、そのテーマでございます。

あなたが、どうぞ、お一人お一人の中に宿り、

「われ生くれば、汝も生くべし」

と、ヨハネ伝でお約束くださったように、父なる神さま・御子なるキリストさま・聖霊のイエスさま・そして御霊の子である兄弟姉妹が、四位一体となって、地上にあなたの御意を、神の国を築いていくことができますように、お一人お一人を祝福し、また、新宿集会を祝福してください。

今日ここに居られない方々、また各地の兄弟姉妹方、またその集いを、どうぞ祝福してくださるように、いります。

この讃美と感謝と祈りを主イエス・キリストの尊い御名を通し御前にお捧げいたします。アーメン。